
インペラートル

石田まみれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インペラートル

【Nコード】

N4068N

【作者名】

石田まみれ

【あらすじ】

物語の舞台はヘルティア連邦。人類は科学と共に古来より伝わる魔術を本の纏め、魔術文献と呼ばれるそれを後世に伝えることで急速な発展を遂げてきたが、一方で様々な理由から魔術をテロや暗殺などの暴力活動にも用いてきた。そんな経緯故にヘルティアでは魔術文献は政府が許可したもの以外は個人での所有は禁じられている。ヘルティア連邦連邦議会図書館調査局調査第四課は、魔術文献を管理する組織として日々国内を流通する違法な魔術文献に眼を光らせている国家機関の一つだ。四課員たちは国家公安という錦の御旗を

掲げ、時に危険すら顧みず死地へ身を投じていく。

opening… (前書き)

この物語はフィクションです。作品に登場する人物・団体等は実在するものとは一切関係ありません。

opening……

南のヨーン大陸にある古都マルクスの朝は清々しい。

森と山脈の国、『蒼き山脈』の異名を持つマルクス市国。国連に承認を受けている国の中で最も小さな主権国家である。東西南北を峻厳な山々に囲まれ、天然の要害に守られたマルクスは、二五〇〇年前に栄えていた世界帝国の帝都だったという経歴を持つ歴史と伝統の街だ。

また、マルクスは宗教の街でもある。世界中に信徒を抱えるロムレス教最高位の聖人”先導者”聖ロムレス生誕の地と伝えられておりロムレス教の聖地としての一面も持つ。街の中心に陣取るロムレス教総本山エルⅡヴォルテール大聖堂と、国家元首が信徒を統べるマルクス教皇であることが何よりの証拠だ。

マルクスの七日市は教皇在位三〇周年記念式典を三日後に控え、巡礼者や記念式典を一目見ようと訪れた観光客で活気に満ちあふれていた。未だに教皇一人に国家権力の全てが集中するという中世の支配体制そのままの国家だが、マルクスはそれで上手く回っている。マルクス教皇が国家、そして世界の精神的支柱であることは紛れもない事実なのだから。今の教皇も一七億を超える信徒を抱えるロムレス教のトップの名に恥じない人格者であり、マルクス市民は勿論世界中の信徒らから絶大な支持を集めている。そうでなければ記念式典を控え、ここまでの活気はない。

だからこそ、警備を怠るわけにはいかない。多くの賓客を招くマルクスは厳戒態勢が敷かれている。この機会を狙ってテロを企てる輩も現れるかも知れない。レオⅡベルガーもそういった警備に動員された警官の一人だった。

「よう、ばーちゃん。スゴい人混みだけど、変なヤツいなかったかい？」

市で果物を売るこの老婆はレオの顔見知りだった。

「さあねえ。見てないねえ」

そうかい、なら良かった。レオは警邏を再開するも、人出が普段の三割増だ。なかなか前に進めない。レオは行き交う人々にもみくちゃになりながら前へ進んでいくが、路地裏に派手な身なりの男たちと、それらに囲まれている女の姿を見逃さなかった。トラブルは嫌いだ、自分は警官である。教皇在位三〇周年記念式典という重大イベントが控えているのは論じるまでもないが、屈強な男たちに囲まれているのは女だ。見逃すわけにはいかなかった。これも職務である。

「ちよつと、そのの――」

トラブルを未然に防ぐため、声をかけた。しかしそれとほぼ同時に一人の男が女の肩に触れた。それからもうあつという間の出来事だった。男の手を払った女は男の鳩尾に拳を突き刺した。激高する男たちを嘲笑うかのように、女は次々と大男らを伸していく。男らの悲鳴は雑踏に紛れて殆ど聞こえない。

たまらず一人が拳銃を取り出したが、女は冷静に男の手から拳銃を叩き落とした。そのまま遠くに蹴り飛ばすと、その流れで男の股間を蹴り上げる。悶絶する男を尻目に、襲いかかってくる男たちを各個撃破していった。流れるような女の動きにレオは見蕩れていた。数人の男たちを完全に制圧した女は、倒れ伏す彼らの真ん中で服の乱れを正す。足下に置かれていた大きな旅行鞆を持ち上げ、おもむろにこつちを見て、そして固まった。マルクスでは珍しい黒髪の女だった。流麗で長い黒髪が嫌でも人目を引く。旅装としての機能とファッショ性を折衷したような白いダッフルコートを巻き付け、緋色の瞳、雪のように白い肌、タイトスカートから伸びる脚線が綺麗だ。背筋が凍るほど美しい女だった。

見つめ合う二人。

女は緋色の瞳を不安げに揺らす。その美しさたるや表現しがたし。だが、レオは警官である。笑顔でこう言った。

「九時四二分。暴行の現行犯だ」

レオはマルクス警察六六六分署所属の警官である。

「しかし、すんげえ美人だな。あれが暴行の現行犯って本当かよ？」

同僚の警官が茶化すように笑った。彼はレオとは違い、刑事事件担当の私服警官だ。

「本当だって」

「まあ、いいや。で、被害者は？」

「下町のワル共。何でも美人の女を見つけたから『遊びたかった』そうで。目撃者の話によると、結構しつこく迫ってたとか。ったくねえ、そーゆーことするから痛い目見るんだって話さ」

「ふーん。何人やられた？」

「一六人」

「で、確保したのは？」

「一六人。全員今市内の警察病院で唸ってる」

「ははっ。どっかの格闘家か諜報員に違いねえ」

「それを今から調べるんでしょう、警部殿。あとこれ、彼女の所持品リスト」

警部はリストに目を通しながら取調室のドアを開ける。取調室には窓はなく、木製の机と椅子しかない殺風景な部屋だ。その取調室では、あの女が手錠を填められてちょこんと座らされていた。あの裏路地での大立ち回りが嘘のようである。警部は椅子に座った。

「こんにちは」

まずマルクスの公用語であるラティウム語で警部は語りかけ、

「えっと、^{ロマーノ}国際語は分かる？」

次に少しマルクス訛りが強い^{ロマーノ}国際語を口にした。

「分かります」

女は流暢な国際語^{ロマーノ}で返答した。

「名前は？」

「ソフィア・レナトウスです」

「歳は？」

「二四です」

「ふーん……。見たところこの国の人間じゃないな。念のため聞いておくが、国籍は？」

「ヘルティアです」

「だろうな。パスポートちゃんと持ってるしな。渡航の目的は？」

「仕事です」

「あっそ。でだ、いろいろ持ち物を調べさせてもらったが……」

ぺらぺらと警部はレオから受け取った資料をめくる。

「で、これ何だ？」

警部は資料を彼女に見せた。そこには押収した彼女の所持品の写真が並んでいる。警部はその写真の中の一枚、一冊の本が写っている写真をリズミカルに叩いた。

「調べさせて貰ったが、魔術文献、本物だ。どうしてあんたが魔術文献を持ってる？ 国際法は勿論、我が国の法律で魔術文献の所持が禁止されてる。分かってるな？」

「ええ」

「まあその件は厄介だから後回しにしよう。どうせ公安局の連中がお前を引き取りに来るだろうし。それより簡単なところからいこうか。何で拳銃なんて物騒なもの持ってんだ？ アナフィエルじゃないんだ。この国じゃ一般人の銃器所持は禁止だ。分かってるのか？」

「護身用です。職業柄、何かと物騒なので」

「職務？ 魔術文献に拳銃？ あんたのお仕事はテロか？ この国に何しに来た？」

「在マルクスヘルティア大使館に連絡を取って頂けますか？」

「普通こういうのは弁護士を呼ぶんじゃないの？」

警部は身を乗り出して追及する。

「まあ、いい。これからゆっくりじっくり話を聞かせて貰うからな。国にはしばらく帰れないぞ?」

睨む警部。しかしソフィアはてんで動じない。その様子を見守るレオ。緊張感が取調室を覆うが、まもなくぱたぱたと耳障りな足音が聞こえてきた。それが次第に大きくなり、取調室の前で止まったかと思うと乱暴に扉が開かれた。レオと警部は予想外の展開に揃って目を丸くした。

「課長?」

「その方を釈放しろ」

「は?」

「聞こえなかったのか? 釈放だ」

「意味が分かりませんよ。理由は何です?」

「釈放だ。さっさとしろ」

「お言葉ですがね、課長、この女は暴行の現行犯でね!」

なおも食い下がる警部だが、ソフィアはそっと立ち上がる。それに合わせるように課長は頭を下げた。

「うちの者がとんでもない事を。国務省から大使館には正式な謝罪を」

「いえ、そこまでして頂かなくとも。これも仕事ですから。痛み入ります」

「ヘルガー巡査、手錠を」

「課長!」

「この馬鹿が。その方はな、ヘルティアの調査官だ」

一喝された警部は目を白黒させる。

「……調査官?」

「ヘルティア連邦連邦議会図書館調査局調査官だ。この方は外交官に準ずる立場なんだよ。拘束したこと自体もう外交問題だというのに。お前らはこの国を潰す気か?」

ソフィアの所持品は速やかに返却されたが、拳銃の返却には手続きが必要で、手続きが終わるまで待たなければならなかった。

「あの、いろいろ申し訳ありませんでした……」

六六六分署の受付ホールで待機していたソフィアに、レオがコーヒーを差し入れる。

「もう済んだことですから」

刺のある言い方だとレオは思った。本当に取っ付き難い人だ。あれだけ刑事課長や分署署長から揃って懇切丁寧な謝罪をしたというのに、態度が全く変わっていない。ヘルティア人はみんなこんな感じの性格なのだろうか。ヘルティアは寒い国だから性格も冷たくなるのか。

「それにしても、混んできますね」

割と失礼なことを考えていたレオだったが、我に返る。

「すいませんね、教皇殿下の記念行事が控えてるんで。いろいろ申請しなきゃいけないことがあるんですよ。今日辺りはどこの分署もいっぱい、本署なんて大変なことになってると思います」

レオはやんわりと説明した。

「その鞆、重そうですね。大丈夫ですか？」

「仕事ですから」

ソフィアは鞆を抱きしめるようにして持っていた。中には魔術文献が入っている。ソフィアは釈放されてから、重そうな旅行鞆を一度も手放そうとはしない。よほどヘルティアの調査官というのは、余程重要な任務なんだろうなあとレオは推測する。

「それにしても調査官ですか……。教皇庁の図書館にもそんな部署があったかなあ……」

「あると思いますよ。どんな国でも魔術文献は厳重に管理されてま

すから」

魔術と呼ばれるこの技術はこの世界では当たり前のように使用されている。その魔術について著された資料は全て魔術文献と呼ばれる。

そもそも魔術とは、世界に満ち溢れている風火水土のエレメンタルを操り超常現象を引き起こす技術だ。自然に干渉する術と言われる。古代では限られた者でしか扱えない神秘の秘術だったが、今では大統領からホームレスまで幅広く、使えて当たり前と言われるくらい普及している技術だ。先進国では小学校で魔術を教えられ、かけ算や割り算を教えている教室の隣で、魔術の基礎訓練が行われているという光景はざらにある。

石油や石炭、天然ガスに原子力という近代的なエネルギーが世の中に出現し、利用が始まってから一世紀以上経つが、それでも魔術という技術は不思議と廃れない。それどころか、エレメンタルの力をもっと効率的に引き出そうと日夜研究が進んでいる。

「調査官って実際に何をしてるんですか？」

「魔術文献の回収と、修復、展示、そんなところです」

「司書みたいですわね」

「まあ、そんな感じかもしれませんね」

「やっぱり、戦うんですか？」

「場合によっては戦いますけど、そもそもあたしは司書じゃないです。調査官です。お間違えなく」

「じゃあ、政府の弾圧から図書館を防衛しちゃったりするあつちですか？」

「違います。あつちは防衛員です。ちょっと楽しんでませんか？」

「まあ、少し」

「いい加減にしてください。殴りますよ」

ソフィアに凄まれ、レオは本能的に視線を逸らしながら話を続けた。

「そもそも、魔術文献なんて調査して何になるんです？」

「まだ知られていない魔術は山のようにあります。それに次世代に魔術を引き継いでいかなければならないし、魔術研究に役立てるという意味もあります。近年の例で言えば、エレメンタルコンデンサーが良い例ですね。エレメンタルコンデンサーの基礎理論構築は、とある魔術文献の発見で大きく前進しましたから」

「エレメンタルコンデンサーって、あの集積回路か」

「世界のありとあらゆる所に満ち溢れているエレメンタルを取り込み、動力に変換する装置であるエレメンタルコンデンサーは人々の生活を変えました。それまではエレメンタルは生物のみにしか扱えないとされてたんですけど、その常識を覆したのがエレメンタルコンデンサーです。現在では大陸間弾道ミサイルからオーブンレンジまで、あらゆるところに採用されていますね。近年では精霊研究にも魔術文献が使われていますし」

精霊とはエレメンタルの集合体である。高濃度に圧縮されたエレメンタルとも言われる。四つのエレメンタル全てに精霊が存在するとされているが、科学的な調査でその姿が確認されているのは火と土の二種類のみである。

「そーいや、かなり前のニュースでやってたなあ。精霊はある程度の自我を持っているって説。あれってホントなんですかね」

「精霊は今のところ人類の手に余る存在ですから。千年の歴史を持つ魔術でさえも精霊を操ることはできないし、エレメンタルコンデンサーでどうこうできる代物ではないですけど」

「でも『インペラートル』なら大丈夫なんですよね？」

「……まあ、そうでしょうね」

歴史学からアプローチした魔術史研究の定説によると、インペラートルは精霊を自由自在に使役できたとされている。風化しつつある過去の文献を読み解く限り、精霊を使役していたとされるたった一人でインペラートルは世界を滅ぼしかねない力を有していたという。尤も、インペラートルが存在していたという科学的な確証はなく、定説の根拠である文献が後世によるでっち上げという説も有力

だ。

「でももし精霊を石油のようにエネルギーにできたら、それって凄いことなんですよね？」

「人類が手を出せない唯一のエネルギー、未知のエネルギーですから間違いなく技術革命が起こるでしょうね。一匹の精霊で世界中の消費エネルギー約二年分を賄えるという研究論文もあるくらいですから」

それは凄いなあ、レオは感嘆した。

「でも俺のばあさんは精霊の研究に反対してるんですよ。ばあさんは熱心なロムレス教徒だから」

「ロムレス教は精霊を神と同視して崇めていますから、研究の対象とするには議論があるのは事実です。最近じゃ『人は神を利用しようと考えてはならない』と、各国の精霊研究機関や研究者個人、精霊研究を容認している知識人にテロ攻撃を仕掛けている過激派組織も出現してますから。そう言う意味でならあたしはマルクスでは嫌われ者かも知れませんか」

噛みしめるように言うソフィア。

「一応、俺警官だけど、マルクスじゃあ過激派の話はなかなか聞かないですよ」

「そうですね。マルクスはロムレス教の国ですから国単位で精霊研究を否定しています。この街は信仰心が向上心に勝る。しかし他の国ではそうもいかないですよ。我が祖国ヘルティアは無論、アナフィエルやその他各国では精霊研究は国家プロジェクトです。過激派の攻撃も散発しているんですよ。まあ、あたしはこうやって魔術文献を扱う職業なので、よく過激派と遭遇します。だから銃が必要なんです。殺されたら魔術文献を盗られてしまいますから。たかが魔術文献の運搬でも国家公安に関わる任務です」

「それ、マルクス人の俺に言っただけ？」

「あなたに殺される程度なら調査官を拝命できません。試しにやってみますか？」

ソフィアは皮肉めいた笑みを浮かべた。一方、レオは裏路地でのソフィアの立ち回りを思い出す。

「図書館の調査官と過激派がね……」

そう言われても、レオには想像できなかった。本の整理を職務とする職員が過激派と戦争していると聞いて、すぐに信じる人は果たしているのだろうか。

「信じてないでしょ？」

「いやさ、いやいや。信じます信じますとも」

まあ、無理ありません。ソフィアは薄く笑った。

「マルクスは平和ですから。ヘルティアでは考えられないくらい」
そうなんですか。

そしてレオの呟きはソフィアに届くことはなかった。レオの声はワゴン車が分署の壁を突き破ってきた爆音にかき消された。静かなホールに轟音が響き、ガラス片が散弾銃のように飛び散った。反射的にソフィアはレオを引き倒し、自らも伏せた次の瞬間、銃声が響き渡った。これ見よがしに襲撃者たちは弾丸を見境無しに撒き散らす。毎分数一〇〇発の弾丸が不意をつかれた市民と警官を薙ぎ倒し、受付職員の頭を吹き飛ばした。ソフィアはレオをカウンターの内側に引きずり込んだ。警察署だけあってカウンターは頑丈に出来ている。それを盾にして弾丸から身体を守る。

「あわわわわ……」

狼狽えながらも、レオは腰から拳銃を引き抜いた。もうすでに何人かの警官が遮蔽物越しに応戦していた。自動小銃を持つ襲撃者の一団に拳銃では勝ち目はない。しかし警官たちは勇猛果敢に応戦していた。

「何なんだよ、あいつらッ!!」

毒を吐きながらレオはカウンター越しに引き金を引く。

「多分、狙いはあたしとこれです」

ソフィアは足下の旅行鞆を小突く。

「はア!？」

銃声に紛れて悲鳴が聞こえてくる。ビスビスと銃弾がカウンターを軋ませる。襲撃者たちは徹底的に目撃者を潰すつもりでいるらしい。足音や話し声を聞く限り、相手は五、六人だ。ここまで徹底的に目撃者を殺しているところを見ると、手慣れた犯行だとレオは勿論、ソフィアは感じていた。

「彼らがロムレス原理主義者、過激派です。精霊研究阻止のためなら彼らは平気で人を殺します。本当は場所が場所だけに速やかに出国する手筈になっていたんですが……」

こんな状況でもソフィアの淡々とした口調は変わらない。だから身分を明かしたくなかったのだ、ソフィアは小さく舌打ちをする。教皇庁と過激派の指導者が繋がっていてもおかしくない。そして考えられるルートは教皇庁だけではない。警察内部に過激派のシンパがいらないとは限らない。それをあの刑事課長や分署長が大騒ぎしたからソフィアが存在、ひいては魔術文献の情報が過激派に伝わってしまったのだ。

ヘルティア政府関係者という立場上、ソフィアはヘルティア国外で銃を抜く訳にはいかない。横目で隣を見る。そこには、ただひたすら狼狽えているレオがいた。拳銃を握っているが、手が震えている。運良く難を免れた警官たちが、襲撃者と一進一退の攻防を繰り返しているが、いくら訓練を積んだ警官とは言え、拳銃だけを頼りに戦うのは分が悪い。今はまだ互角だが、そのうち自動小銃を操る襲撃者らに圧されてしまうだろう。

仕方がない。正当防衛だ。そう言い聞かせ、立派な遮蔽物の中でソフィアは古語ハインズを口にした。両手首に填めているハングルが鈍く軋んだ。ぎりぎりと頭が痛む。心臓が握りつぶされたような苦しみ。ソフィアを蝕むが、それでもソフィアは掌の上にごつごつしたソフトボールのような物体を作り出す。魔術で創り出したそれは、水で出来ており、ぐるぐると不気味に蜷局を巻いていた。

「お、おい……。そ、そんなもんでどうするつもりだよ。銃で武装してんだぞ……」

魔術は、あくまで生活を豊かにするだけの道具に過ぎない。魔術で人が殺せないわけではないが、ナイフを使った方が効率的であることは周知の事実、常識だった。数人も人を動かしてようやく発動できる超大規模術式や魔術文献を使うなら話は別だが、一人が扱う魔術で人を殺すのは難しい。銃火器で武装したテロリストをしとめる力は魔術にはない。

「あたしは、ちょっと、特異体質なので……」

頭痛と吐き気に悩まされながら、ソフィアはそう言った。レオがその真意を追及する前に、彼女はあたかもゴミを捨てるような手付きでカウンターの外へ水玉を投げ捨てた。襲撃団の誰かが何かを叫ぶが、もう遅い。

次の瞬間、ポンと気の抜けたような炸裂音が響く。

鋭いが、一方でそれほど破壊力のない爆風が吹き荒れた。ソフィアが投げた水爆弾は、爆風で人を吹き飛ばすようなタイプではない。破片で人を確実に死に追いやるタイプの爆弾だった。炸裂すると剃刀のような鋭い水滴が四方八方に飛び散る仕組みになっている。

静かになったことを確認すると、ソフィアは一息付いた。不快感も収まった。レオと共にカウンター越しに戦場をのぞく。ソフィアは特に警戒はしていなかった。カウンターの外は燦々たる有り様だった。誰が誰だか分からないような死体がたくさん転がっていて、至る所で血溜まりが出来ている。辺り一面血の臭いで満ち溢れ、射殺された後にソフィアの水爆弾で傷付けられた死体は見られたものではない。隣でレオが激しく嘔吐していた。

ソフィアはカウンターから外に出た。死体を一つ一つ確認し、生存者がいないことを確認する。ぱたぱたと生き残った警官たちが集まってきた。

「……『しんせいきょうだん神精教団』」

ソフィアは襲撃者の死体の前で、ぼそつと呟いた。警察に情報源があるということは大きな組織に違いない。となると思い当たるのはマルクス教皇庁ともパイプを持つとされるロムレス原理主義、神

精教団しかない。神精教団は世界中に支部を持つ世界最大の過激派組織で、シンパは世界中に散らばっている。シンパが分署にいても何ら不思議ではない。それにマルクスはロムレス教の総本山。市民の信仰心が厚いため、過激派に対してある程度の理解を示す市民もいる。神精教団にとっては格好の隠れ場所と言うわけだ。

「こ、これが……」

少し回復したレオがソフィアに歩み寄る。

「彼らのような過激派から魔術文献を守る、それがあたしたち^{とちよ}四課^{うよんか}の役目です」

opening… (後書き)

そろそろ長めのお話になると思います。最後まで気長にお付き合い頂ければ幸いです。恐惶敬白。

任務《1》（前書き）

この物語はフィクションです。作品に登場する人物・団体等は実在するものとは一切関係ありません。

任務《1》

その日、ソフィアⅡレナトゥスはヘルティア連邦の首都マスクヴァを北に歩いていった。

世界最大のアクーラ大陸ほぼ全域を領土に持つヘルティアは、七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの連邦国家と言われるほど多様性を内包している北の超大国だ。ヘルティアと肩を並べる国と言えば世界広しと言えども南のアナフィエルくらいしかない。

ソフィアはやがて巨大な壁の前に辿り着く。マスクヴァは円盤状に広がっている都市だ。都市は五つの地区に分けられ、時計回りにA地区からD地区、高い城壁と四つの門によって他と隔離されている中央のG地区からなる。G地区には大統領官邸や連邦軍参謀本部や外務省など連邦政府中枢機関が集まっており、そのため連邦政府直轄地として連邦政府と連邦軍が厳重な管理下に置いている。内務省発行の許可証を持つ者でない限り、G地区に立ち入ることすら許されない。

検問所に近付くと、警戒に当たっていた首都警備大隊の兵士に取り囲まれてしまう。一個小隊ほどの人数だ。兵士たちは全員ケブラーのヘルメットにサングラス姿で、顔はほとんど分からない。ざらりと太陽に反射する自動小銃の銃口が妙な迫力を帯びていた。五年前まではマスクヴァ市警がゲートの警護を担当していたが、内務省爆破事件を機に連邦軍に警備が移管されたのだ。

「連邦議会図書館調査局のソフィアⅡレナトゥスです」

兵士に許可証を渡すと、兵士は無線で照会を始めた。照会中も決して銃口がソフィアからそれることはない。

まもなくして通行の許可が下りた。検問所を潜ると、そこはヘルティアの中枢G地区である。マスクヴァは市内に割と帝政時代の古いヘルティア風建築が数多く残っているが、G地区は近現代風の高

層ビルのみが無機質に建ち並ぶ。マスクヴァであってマスクヴァでない。それがG地区だった。

冬のマスクヴァの夕暮れ時は寒い。昼間ならまだ辛うじてマイナス三度から八度辺りをうろうろしているが、日が落ちると途端に氷点下二〇度まで冷え込んでしまう。だがそれでもヘルティアという国ではマシな方だ。ヘルティアの気候は寒冷で、南部は広大な平原だが、北部は広大なタイガがその大部分を占めており、さらに北に行くとなると、樹木の生育しないツンドラ地帯となる。北方の僻地に行けば、それこそオーロラと白熊の世界なのだ。

寒さに耐えながらしばらく歩いていくと、一際目を引く白塗りの建物が見えてきた。いくつもの尖塔をいただいたその荘厳な建物は、帝政時代に建設された歴史と伝統の建物だ。古い建物だが、大理石の白い輝きが失せることはない。威風堂々とした面持ちのこの建物こそ、連邦議会議事堂である。

内部は見かけよりも広い。ロビーに入ると、その古風な内装には似つかない近代的な警備関係の機材が並んでいた。ゲート付近以上の物々しい警備体制だ。室内にも関わらず、自動小銃を手にした何人も兵士が金属探知機を取り囲むように配置されており、来訪者に目を光らせている。

「ソフィア」

「……ルチアーニ統括官」

手荷物が、仕上げにボディースキャンを受けてようやく入館を許可されると、すぐ近くのエレベーターの前で男が待っていた。男は茶髪で、ブランド物のスーツを着こなしている。男はアルビノルチアーニ統括官。ソフィアの上司に当たる人物だ。

「初任務だったのにマルクスじゃ災難だったな」

「いえ。こちらこそお手数をおかけしました」

「下まで付き添うよ。オフィスに回収してきたの提出してくれ。それから四課長が呼びだ」

アルビノは柔らかな表情を浮かべて、そう告げた。そうこうして

いると、エレベーターが停まった。両院の議事堂は上階にあるが、連邦議会図書館は広大な地下にある。連邦議会図書館の外局である調査局もそこに併設されていた。

「どうぞ。レディーファーストだ」

二人はエレベーターに乗り込む。

一

ヘルティア連邦連邦議会図書館調査局。

連邦議会を構成する組織の一つで、連邦議会両院や連邦議会議員個人のために資料提供など、文字通り調査活動を行う部局だ。蔵書数、予算額、職員数など全ての点で世界最大規模を誇る連邦議会図書館を実際に運営しているのは調査局だと言っても過言ではない。

二人を載せたエレベーターの扉が開く。地下一七階がソフィアとアルビノが所属するヘルティア連邦連邦議会図書館調査局調査第四課、通称、どちようよんか図調四課のフロアがある。地下一七階にあるフロアには当然窓一つ無いが、照明配置など様々な工夫が施されており、あまり息苦しさは感じられない。

調査局は調査第一課から調査第四課まであり、調査官や事務官が日夜働いている。ソフィアたち四課以外は図書館の司書や議員秘書と殆ど代わり映えのしない仕事しているが、魔術文献を相手にしている四課は違う。四課が所管する業務は、違法に流通している魔術文献の調査、発見から摘発まで、魔術文献に関すること全てである。四課の職務は基本的に警官や軍人のそれとさほど変わらない。そんな職務性から四課には生え抜きの人材は少なく、八割はソフィアのような外部組織からの移籍組だ。アルビノは連邦軍出身、ソフィアはヘルティア連邦保安庁（FSA）からの出向者だ。

この世界で魔術はホームレスから大統領まで使える技術だ。小学

校で教えているほど、この世界になくてもならない存在だ。その魔術の指南書が魔術文献である。

魔術文献は人々の生活を豊かにする素晴らしいアイテムだが、反面影の部分が非常に大きい。帝政時代、国内の魔術文献は基本的に全て宮廷が独占していた。お抱えの魔術文献作家たちは皇帝のためにその外見の美しさ、納められた魔術の優美さなど、競って魔術文献を書いていた。同様なことが世界各国で起っており、今や魔術文献は絵画や彫刻と並んで美術品、芸術品としての側面も持っている。ヘルティアでは、革命時の混乱でその魔術文献は四散してしまい、マルクスの事案のように、国外に流失してしまったものも少なくない。かつて宮廷が独占していた魔術文献作家たちも同様だ。現在では魔術文献は連邦政府の厳重な統制下の元、認可された魔術文献作家たちの手によって、認可された魔術を納めた魔術文献が世に送り出されている。

しかし、連邦政府の認可を得ず、または取り消された作家たちの手によって、非合法的な魔術文献は著されていることもまた事実である。それらの魔術文献がテロなどの非合法活動に利用された例は枚挙に遑がない。三年前、ヘルティアからの分離独立を唱えるクロベニア人武装勢力が起こしたマスクヴァ同時多発テロ事件はその一例である。

まもなくして二人の眼前に巨大な扉が見えてきた。銀行の地下金庫のような重厚な扉だ。扉の向こう側にあるのは、ヘルティアの魔術文献政策の総本山である。アルビノは壁に取り付けられたコントロールパネルを操作し、身分証をリーダーに読ませる。身分証にICチップが埋め込まれているのだ。

ピーッと割と派手な電子音が響く。赤が点っていたランプが緑に変わる。分厚い扉のロックが解除された合図だ。

扉の向こうには、遙か見渡すほどの広大な空間が広がっていた。ざっと見渡しただけでも五〇人以上のスタッフが動いている。中央に作られた通路を挟み、左右に長テーブルが幾重にも整然と並んで

おり、長テーブルの上にはパソコンや資料が載っていた。講堂の中を調査官や事務官たちが行き交い、ピリピリとした雰囲気と熱気が混在している。

講堂の上座には、巨大モニター群が見る者を圧倒するように設置されていた。どのモニターも画像の乱れはなく鮮明だ。三〇面もの六〇型液晶ディスプレイには、地図、現場写真、不法に魔術文献を所持したために四課が執行した犯罪組織など様々なものが映し出されていた。

モニター群の根元には、長テーブルを数台組み合わせた指揮台がある。スタンドマイクが人数分並んでおり、大規模事案が発生した場合、課長や統括官など四課幹部陣が指揮台から直接指示を出すのだ。

「四課長室はあっちだ」

アルビノが指を指した先、講堂の上座に置かれている指揮台の向こうに扉が見えた。

「その前にソフィア、苦勞して持ってきた魔術文献を回収したいんだが」

「はい」

ソフィアはアタッシュケースを机の上に載せた。ソフィアが把握している九桁の暗証番号と、統括官アルビノの身分証でアタッシュケースの封印を解く。厳重な封印も魔術文献保護のためには致し方がない。実はアタッシュケースも梱包用の保護材も全て四課の技術班が開発した特注品だったりするんだ。

「これです」

ソフィアが運んできた魔術文献、それは雁皮紙で丁寧^{がんぴし}に作り込まれた一冊の上品な物だった。帝政時代、宮廷作家が書き上げた文化的価値が高い一冊だ。

「情報通り、カテゴリーCだな」

魔術文献は連邦議会上院魔術委員会よりその危険度により四段階にカテゴリー分けされている。最も危険度が低く、一般に流通が認

めている魔術文献はカテゴリーD、一冊で戒厳令が発せられるほど最も危険度が高い魔術文献がカテゴリーAといった具合だ。そのカテゴリーによって四課や各機関は警戒態勢や回収に投入される人員の規模や装備が違って来る。

「それにしても、一八〇〇年代のにしちゃけにくすんでるな」

白手袋を填めたアルビノが魔術文献を丁寧に精査する。

「ま、この程度だったら修復できるから問題ないけど。確かに受け取ったぜ。あー」

辺りを見渡して、

「イリヤ、これ解析班に渡しといてくれ」

アルビノはたまたま近くで作業していた男を呼び寄せた。ファイルをいくつも抱えた彼は露骨に表情を歪める。

「……統括官、徹夜明けなんスけど」

「人間一日や二日の徹夜じゃ死なねえよ」

呼び止められた男はヘルティアでは珍しい紅髪だった。目の下に大きなくまを作っている。男はきびきびと働いている他のスタッフと同じ四課員とは思えないくらい緩慢な動きでアルビノの元に寄って来た。

「よろしくな」

渡す、と言うよりは無理矢理押し付けたという感じだった。

「ところでそちらさんは？」

「新入りだ」

「ソフィアⅡレナトウスです」

「執行九班の調査官付事務官、イリヤⅡCⅡハグストレームだ。よろしくな」

図調四課の実動単位は班である。四課ではどんな事案に対応するにも班単位で行動している。一つの班は調査官と調査官を補佐する事務官で構成され、基本一班四名で編成されていた。四課には執行班だけでも五〇班以上編成されており、連邦各所で日夜任務を行っている。

「……何か？」

握手を交わすが、ソフィアはそこで違和感に気付く。初対面なのにイリヤが苦笑しているのである。

「いやあ、こんな綺麗な女性がマルクス警察をぶっ潰したなんてちょっと信じられなくて」

「ぶっ潰していません」

綺麗な女性と褒められた嬉しさが一瞬で吹き飛んだ。警察ぶっ飛ばすってどんなぶっ飛んだ人間だ、と思わず叫びたくなる。そんなソフィアの様子が面白かったのか、アルビノはけたけたと笑っていた。

「なんなんですかその根も葉もない噂」

じとつとソフィアはアルビノを睨む。

「情報は出来る限り全員で共有しないと。課一体で物事を運ばないと勝てる戦も勝てなくなる。そうだろう？」

「この話、自分に教えてくれたの統括官だから。ついでに言いふらしてるのも統括官だから」

ぎろりとアルビノを睨み付けるソフィア。

「まあまあ。四課は腕っ節が頼りの武闘派集団だから。武勇伝の一つや二つ、課内に流れたっていいじゃん。尊敬されるよ？ 今後の仕事で役に立つかも」

「役に立ちません。逆に人間関係がギクシャクします。あたしがイジメられたらどうするんですか？」

「それはない。だって警察吹っ飛ばすような人間は虐められる方じゃなくて絶対イジメる方だから」

「イジメません」

「ま、ちよつとした俺なりのプレゼントだよ。良かったじゃん、みんなに早く認知して貰えて。人気者街道まっしぐら」

「だからと言って変な噂を流して良いって訳じゃありません」

「いやー、うちは優秀な人材を獲得できて幸せ者だ」

ソフィアは肩を落とした。彼女の古巣であるFSAが病的に融通

が利かない厳格な組織だった。上官の命令には絶対服従が当たり前。意見することすら許されない場合もある。FSAと四課のギャップに慣れることから始めようとソフィアは思う。尤も、彼女はそんなそぶりは一切見せない。

「さて、与太話はこれくらいにしといて、じゃイリヤ、魔術文献それよろしくな」

「了解っす……」

「あ、後でクララーと作戦会議室に來い。ピーチエルで仕事だ」

どっへーと背後から溜め息が聞こえてきた。思わずソフィアが振り返ると、そこには項垂れながら魔術文献を持っていくイリヤがいた。足取りが重々しい。

「んじゃ行こうか」

ゆつくりを息を付き、アルビノはソフィアを見据える。

「四課長ボスがお待ちだ」

二

ソフィアが上司の命令で、ヘルティアの防諜、犯罪対策を担うFSAから図調四課に出向するよう命じられて一週間。

ようやく図調四課を束ねる課長との対面に漕ぎ着け、安堵するソフィアだったが、課長室に入ったソフィアを出迎えたのは机の上に薄高く積み上げられた書類の山だった。散らばる書類で床が見えず、足の踏み場がないほど散乱している書類。どこを見ても書類、書類、書類、書類……。課長職がいかに激務かということ象徴しているような書類群の中で、件くだんの四課長がいる。

「あの人ですか」

「そ。あの書類の山の中で爆睡してる馬鹿女が図調四課うちの課長、エレナー・ヴォルコヴァ。御歳三五歳独身彼氏なし」

ぐおー、と獣みたいな寝息を立てている四課長。アルビノは平然と床に散らばっている書類を踏みつけ、四課長の元にたどり着くと、机に載っていた分厚い辞典で四課長を小突いた。ばこんと軽い音が四課長室に響く。

「あが、ああああア、……あ？」

「人間的な応対は出来ないんですか？　もう良い歳なんですから」

「むー、もうちょっと……、んごー」

「四課長。新入り連れてきましたよ」

「んごー」

アルビノは無言で分厚い辞典を手を取った。今度は大きく振る被った。

「こんなんだからだから貰い手がないんだ、よっ！！」

そのまま辞書を振り下ろした。先程とは比べ物にならないくらい、迫力満点な音が四課長室に響く。

「あがつ、……ああ、アゴが、アゴが壊れる……」

「四課長。例のFSAからの出向してきた」

「……し、出向、……ああ、例の、ね」

のそつと四課長が顔を上げた。まず、軽くウェーブかった金髪が目を引く。直立不動で何も言わなかったら結構な美人なのにと、横でアルビノがなかなか失礼なことを言っているが、寝ぼけ眼の四課長には聞こえていない。

「あんたが、ソフィア、……ソフィアⅡレナトウス中尉ね。あー、ごめんなさいね、徹夜明けだったもので……。四課、……課長の、エレナーⅡヴォルコヴァよ。ようこそ我が四課へ……」

「ソフィアⅡレナトウスです。よろしくお願いします」

「あら、……礼儀正しくて、……良い子じゃない」

あくび混じりに、四課長。

「どこかの腐れ四課長おんなとは遺伝子レベルで違いますからね」

「ううう。……誰が、腐れよ。み、見なさい、この美貌」

ふらふらと椅子から立ち上がろうとするも、腰が砕けてしまった。

へなへなと椅子にもたれ掛かる。もう何もかもが台無しだった。ソフィアは勿論のこと、見慣れているはずであるアルビノまで何故だか悲しくなってきた。

「もうしゃきつとしろよ、恥ずかしい」

アルビノは四課長の両肩を押し、無理矢理座らせる。四課長はムスツとした表情でアルビノを睨んでいたが、言わずもがな、寝起きの女に眼力に迫力はない。

「入局早々悪いね。いつもこんな感じだから」

「いつもなんですか？」

「大丈夫。すぐに慣れる」

「あまり慣れたくありません。そもそも慣れていいんですか？」

「そこは賛否両論だなあ」

アルビノが戯けて笑った。

「とにかく四課^{うち}はソフィアに期待してるんだからな」

「……うちって、魔術関連の業務なのに、その手の専門家が少なくてね。士官学校^{カデット}で対魔術戦を専攻し、……FSAでは対魔術戦部隊で活躍……。経歴書は、寝る前に、読んだわ。???期待してるから。四課では、副官待遇の調査官として、その手腕を振るって頂戴、ね……」

アルビノの言葉を引き継ぐようによれよれの口調で四課長がそう言った。

「で、ソフィア。早速配属の件だが???」

「四課長！」

アルビノの声を遮るように、ファイルを持った事務官が課長室に飛び込んできた。

「何よ、急な用事じゃなきゃ、……後にしてくれる？」

四課長は少し迷惑そうに、飛んできた事務官に言った。

「緊急な案件です。えっと、」

事務官は直ぐに報告しようとしたが、ソフィアの姿を見つけると、躊躇した。見慣れぬ顔であるソフィアがいる中で口にしていいのか

迷っているのだ。見かねたアルビノは構わないからと事務官に告げると、彼はまるで決壊したダムのようにまくし立てた。

「現地駐在員より報告。魔術文献が発見されたことです。場所は連邦極東管区エヴァンジェ自治州の主要都市、サハ！」

「あら、……丁度良い。詳しい情報は？」

「こちらに」

事務官は四課長に持ってきたファイルを差し出した。四課長はそれを受け取るなり、はらはらとページをめくっていく。

「……これだけ、証拠が揃えば、問題ないわね。魔術委員会に……、令状申請しといて」

事務官にファイルを返す。事務官は一礼してその場から立ち去った。

「ルチアーニ統括官」

「直ちに執行班を展開させます」

「手持ちに”浮き”は、あるの？」

「ピーチェルの一件に投入しようと思った九班があります。二日前に帰投したばかりですが」

「……仕方ないわね。サハの事案は、令状が、下りる段階まで進んでるから……こちらを優先させましょう」

「ミーティングしようといりや呼び出したばっかなんだけどな……。ま、いっか別に」

アルビノは呟き、頭を掻く。

「でもまあ、九班なら、好都合ね」

四課長は流し目でソフィアを見た。

「九班は副官が欠員でね、ソフィア、……貴女にやってもらおうと思ってるの」

「副官、ですか？」

「そ。一年前に副官がね、殉職しちゃってね、それ以来九班はずっと……副官不在で回してたの。……わりかし有能な参謀役が、いるにはいるんだけど、それ以上に武闘派が……いろいろなね、……実力

は申し分ないんだけど、まあ、おかげで荒事しかできない、頭の悪い執行班になっちゃって、……困ってたのよ。FSAで培ったオペレーションに期待してるわよ」

四課長は苦笑した。

「了解」

「ところで、九班の連中は本部にいるの？」

「イリヤは四課本部で作業中、クラールとミハイルは非番ですので正式に出撃許可が下りれば直ちに呼び出します」

四課長の問いにアルビノが答える。

「良いわ。九班に、出撃命令」

そう言うの大あくび。

「と言うことで、早速仕事よ、ソフィア。概要は追って、説明するから。準備は抜からないでね」

「了解。では、失礼します」

四課長室から出ていくソフィア。

目を擦りながら四課長は一度両頬を自分で叩き、活を入れる。

「今日も徹夜かな」

「四課長がもつとしゃきしゃき仕事すりゃ早く終わると思います」

「あら、ご機嫌斜めね」

不敵な笑みを浮かべた四課長はアルビノを見た。

「ご不満のようね」

「正気ですか？」

残されたアルビノは心なしか表情が優れない。

「そりゃ顔合わせもなしに現場に送り出しちゃったのは悪いと思ってるわよ」

「いえ、そうじゃなくて……」

四課長はすぐにアルビノの言葉の裏を読み取った。

その上で、毅然と告げる。

「心配ないわよ。例え『オルガン』だろうと、私の部屋に足を踏み入れた以上、もう私の部下なんだから」

任務《2》（前書き）

毎度のことですが、この物語はフィクションです。作品に登場する人物・団体等は実在するものとは一切関係ありません。

任務《2》

四課本部。

自分に宛てがわれたロッカーを開ける。中には四課の制服と制帽、そして腕章と装備一式が詰まった軍用バッグがあった。

ソフィアは上着を脱ぐと、大外套のような制服を纏う。髪を纏め、四課員を証明する双頭の鷲の記章が刻まれた制帽を被った。最後に『図調四課』と大きく赤地に白抜き腕章を右腕に巻き付け、装備が入った軍用バッグを掴む。

ロッカーの扉に付いていた鏡には上から下まで漆黒の四課員が写っていた。

少し制帽がずれていることに気付いた。

それを直し、ロッカーを閉めた。

一

連邦議会議事堂のエントランスに二人組が待っていた。

一人はイリヤⅡCⅡハグストレーム。気怠そうにキャリーバッグに腰掛けた彼は、ソフィアと同じ制服姿だ。

そしてもう一人は小さな女の子だった。身長は一五〇程度だろう。制帽を被らずにくるくると回している。大きく綺麗な碧眼にやや幼い顔立ち、淡く化粧が施されていた。肩に届くほどの金髪、服装はイリヤと同じところを見ると同じ四課員なのだろうとソフィアは客観的に判断する。

幼女はソフィアとアルビノを見付けると、ソフィアの元までずかずかとやってくる。

「へー」

上から下までソフィアを舐め回すように見詰め、

「へー。これがねー」

ギッと少女はソフィアを目付き鋭く睨みつけた。一昔前の不良顔負けだ。恐怖よりも疑問が先立つソフィアは思う。何だこの餓鬼。FSAで非現実的な現場をそれなりに渡り歩いて来たソフィアだが、少女に下から睨みつけられるという経験はなかった。

「これがウワサの新人かよ。ワンって言ってみな。ほれほれ」

口が悪い。どこでどう育てばここまで口が悪くなるのだろうか。

そんな素朴な疑問を抱きつつ、ソフィアは訪ねる。

「統括官。この少女は？」

「ああ、こいつは???」

「誰が少女だ!! 立派に成人してんだよ陰険女!!」

アルビノを押しつけるように、少女はソフィアの胸ぐらを掴んだ。少女と言われて相当頭に来たのか、迫力が少し増した。しかしソフィアは何のその。冷たく少女を見下ろして言う。

「誰が陰険ですか。潰しますよ、少女」

ソフィアは胸ぐらを掴む少女の手を払う。

「このアマ、良い度胸だな。まあ、いいぜ。テメエ、一応後輩だからな。警官殺しだか知らないけどな、良い気になってんじゃねえぞ。いいか、覚えとけ。このウチが九班のボスだ。猿でも新人はボスにあいさつするもんなんだぜ?」

「あたしは人間なので、猿の世界は知りません」

自称ボスを小馬鹿にしたような冷笑を浮かべるソフィア。それを少女は見逃さなかった。

「そうかそうか、よく分かったぜ。ウチが、一から四課のやり方ってのを叩き来んじやるわアアアッ???!!」

少女が飛びかかる。だが、ソフィアは少女の飛び膝蹴りを躲すとそのまま組み伏せた。

「うおおおおお???ッ!! ウチの身体に気安く触るな???ッ!! はーなーせ???ッ!!」

少女はソフィアの下でバタバタ蠢く。だが、体格的に不利な少女はソフィアから逃れられない。

「で、少女は何なんですか？」

「この、このアマああああああっ！！先輩をこれ呼ばわりして良いと思ってるのか？？？ッ！！」

「きんきん騒ぐな。いい加減黙れ、この少女」

ソフィアはそのまま腕を少女の首に引っ掛けて首を締め上げた。しばらく抵抗していた少女だったが、次第に抵抗力が落ち、やがて動かなくなった。無造作にソフィアは少女を放すと、彼女は顔面を床に打ち付けた。まるで伸びた蛙だ。

「お前、本気でやっただろ？」

「敵は排除するのみです。テロには屈しません」

ばんばんと手を払うソフィア。一仕事終えたソフィアの表情は晴れ晴れとしており、そのあまりの晴れ晴れしさにイリヤはぞっと背筋が凍った。

「で、少女は何なんですか？」

ソフィアはイリヤの方を向く。

「クラークニヤジェワ。俺が担当してる調査官」
面目なさそうにイリヤは肩を落とした。

「こんなのが調査官なんですか？」

ソフィアは目を丸くする。

「担当事務官の俺が言うのもあれだと思うけどさ、こんな中でも調査官なの」

イリヤは溜め息を付き、

「世も末ですね。胸中お察しします」

「ありがと。こいつのせいで何度転職しようと思ったことか」

「FSAに来ますか？」

「そうだな……。もしいざって時は口利きよろしく」

妙なところで意気投合する二人。その時、

「てーめーえーら……。覚悟できてんだろーな……」

クラークニヤジェワが復活した。物凄い殺気を発している。

その光景を、まるで珍獣を見るような目でソフィアは見つめていた。

「復活早いですね」

「クーは四課で二番目にタフな人間だからな。ちよつとやさつとじやヘコタレねえよ」

イリヤが解説する。

「ハッ！　ざまーみやがれてんだよ。このまま調教してやるから覚悟しろよこの陰険女！！」

手をわきわきさせ、怪しく目を光らせてソフィアに殴り掛かろうとするが、

「あー、そろそろ良いか？」

しばらく傍観を決め込んでいたアルビノが口を挟む。

「止めるなアルビノ。女にやらなきゃなんねえ時がある」

「改めて紹介するまでもないと思うが、ソフィアⅡレナトウス調査官だ」

「無視かよ！？」

「今日付けでこの九班に配属された。まあ、出来るだけ仲良くやってくれ」

そう言ったアルビノはソフィアに茶封筒とファイルを渡した。

「これ、封筒の中は魔術文献差押令状な。連邦議会上院魔術委員会の正式な執行命令書だから扱いに注意すること。あと、同封しとしたファイルは本件の概要だ。頭に入れとけ」

「了解です」

「ちよつと待ったッ！！」

吼えたのはクラークだった。

「アルビノ、ウチも調査官だろ！？」

「そうだな」

「何で令状そいつに渡すんだよ！！」

「お前と同じ調査官でも彼女は副官待遇で出向してるの。つまりミハイルの補佐役やソフィア。お前じゃないの」

イリヤが説明するが、クラーラは意に止めない。

「ふざけんじゃねえ!!」

がるるると唸りを上げて威嚇するクラーラだが、タイミングを計ったように連邦議会議事堂の前には軍用車が滑り込んできた。イリヤがクラーラの事務官^{おもりやく}として、未だにわーわー叫んでいるクラーラを強制的に軍用車に引っ張り込んだ。手慣れたその姿にソフィアは人知れず舌を巻く。

「行き先はマスクヴァ郊外のラフレンツェ空軍基地。そこから空軍の輸送機でサハまで飛べ。だいたい八時間ぐらいかかるから、ファイル渡しただろ？ それまで概要を頭に叩き込んでおけ。存分にやってこい。期待してるぞ」

「了解です」

「あ、ちよつとストップ」

軍用車に乗り込み、扉を閉めようとしたソフィアを先に乗っていたイリヤが制止した。

「肝心の班長は？」

「ミハイルはラフレンツェ空軍基地だ。そこで合流してくれ」

「りょーかい」

「ミハイル？」

「九班の班長。いろいろひん曲がってるけど、悪いヤツじゃないから」

「はあ」

「じゃあ行ってこい。神のご加護がありますように」

アルビノは扉を閉める。軍用車が走り出す。

二

ヘルティア空軍最大の基地、ラフレンツェ空軍基地はマスクヴァ

郊外にある。

言わずもがな、ヘルティアの首都マスクヴァ防空の要であり、連邦空軍総司令部が置かれているのもここだ。空中空母専用ドックもここにある。三〇〇〇メートルを超える滑走路が八本、管制塔がスクランブル発進に備えて待機している最新鋭戦闘機を見下ろしており、その傍には格納庫がいくつも並んでいる。各所に設置された対空砲が空を睨み、盤石の体制を敷いていた。

ソフィアらが軍用車から基地に降り立つと、案内役の兵士が敬礼で出迎えてくれた。身体に染み着いているヘルティア式の敬礼で返答し、兵士の案内で基地内を移動する。

図調四課が空軍機を使用するのは珍しいことではない。図調四課は、広い連邦の領内全域をカバーしなければならない。四課が自前で航空機を購入し、運用するにも莫大な費用がかかる。そのため連邦各地に基地を有し、定期的に物資輸送を行っている空軍とは密接な協力関係を築いてきた。空軍は四課に足を提供し、四課は魔術に関する情報を陸海軍より一足先に提供する。そんな蜜月の関係が代々続いてきた。空軍が運営し、世界に誇る空中空母艦隊の建造に四課が提供した情報が役に立ったことは、関係筋の間では有名な話だ。ソフィアたちが案内されたのは、八本あるうちの五本目の滑走路だった。すでに一機の大規模輸送機が待機している。空軍が誇る大型輸送機HT-124である。兵士たちに『ババヤガー』の愛称で親しまれているこの輸送機は、実用輸送機として世界最大級であり、最大ペイロードは一五〇トンにも及ぶ大搭載機だ。搭載能力から大型ヘリコプターを運ぶなど、空軍では大車輪の働きを見せている。FSA時代、ソフィアも何度かお世話になった。

ソフィアたちが向かう連邦極東管区エヴァンジェ自治州の主要都市、サハはマスクヴァから七〇〇キロ離れた東にある。ババヤガーだと一度も給油を挟まずに飛んで行くことができる。

サハは、少数民族エヴァンジェ人の街であると同時に天然資源の街でもある。石油、石炭、天然ガス、金銀などの地下資源が豊富に

眠っており、連邦全土で産出される地下資源の実に六割がエヴァンジェ自治州産である。サハはヘルティアにとって重要拠点の一つであり、サハ基地は連邦極東管区最大の基地だ。

三人はハッチを大きく空けていたババヤガーの貨物室に乗り込む。急ごしらえの座席が四つ取り付けられている他は、コンテナしか見えない。ましてや旅客機ではない。骨組みは剥き出しだ。殺風景な風景である。内装はないと言っていい。この輸送機はソフィアらのために用意されたものではなく、物資をサハ基地まで運ぶ連邦空軍の定期便に過ぎない。ソフィアらがその一角を間借りしているのである。

『まもなく離陸いたします。もうしばらくお待ち下さい』

機内に取り付けられたスピーカーからアナウンスが聞こえた。ハッチが閉まると、すぐに離陸した。まもなく独特のGから解放される。そう言えば、ラフレンツェ空軍基地で班長と合流する手筈になっていたのだが、そう言えばどうしたのだろうか。ソフィアが疑問を抱いていると、目の前の座席に座っていたクラーラが急に喚き出した。

「やっぱり納得できねえー！！ 何でウチを差し置いて新人が副官待遇なわけ！？」

「幼女だからでしょ」

「何だこの陰険女！！」

クラーラがソフィアを指差す。さすがにソフィアもイライラしてきた。

「黙れよ幼女」

「やるか陰険！？」

「外に放り出すぞ幼女」

「まあまあまあ」

一触即発の二人をイリヤが何とか諫めた。

「お前ら頭冷やせ。特にクー」

「だってよー、新参者がいきなり副官っておかしいだろ」

「俺は別におかしいとは思わねえけど」

「はああああ？」

「だってそーだろ、実績から考慮して」

横でイリヤが苦笑する。

「オツムが弱いクーにゃ副官は勤まらないってこと」

「イーリヤー……ケンカ売ってんのか？」

「何騒いでやる」

突然、クララの声以外の声がソフィアの背後から飛んでくる。

イリヤとソフィアが振り返ると、黒い大外套と制帽姿に銀のアタッシューケースを持った男がそこに立っていた。眼光鋭い男で、不機嫌丸出しだ。まだ機体が安定していないにも関わらず、男は平然とそこに立っていた。

「いえ、別に……。クーが無能だって話ですよ」

「イリヤ殺す。ゼツテ殺す」

クララは座ったまま、ちょうど正面に座っていたイリヤを数回蹴り飛ばしていた。

「ところで班長、ほら、例の新人さん」

話の流れを強引に曲げたな。今まで静観していたソフィアはそう思った。

「ああ。F S Aから来たってのはあんたか」

「ソフィアⅡレナトウスです」

「ミハイルⅡバクーニン、九班の班長だ」

男はそう名乗ると、彼にあてがわれていた席にどかと座った。

長身痩躯、野生の狼のように鋭い眼光が印象的な青年だ。

「はんちよー、今までどこにいたんだよ」

「コックピットの前。操縦士が知り合いだったからな」

素っ気ない言い方だった。だが、それ以上でもそれ以下でもない。

「新人。事案の概要、頭に入ってるか？」

「一通りは。統括官からの資料を読みましたので」

「そうか。イリヤ、概要」

「へ？」

「寝起きで任務頭に入ってねえんだ。せっかくの休暇だったのによ、アルビノのクソ野郎め、人手不足だからって面倒ごと俺らに寄越すなっつーの」

「新人に聞いたいてそりやないでしょ、仮にも班長なんですからしつかりして下さいよ」

そう言ってイリヤはファイル差し出した。

「面倒だから読め」

「それぐらい自分でやってください。ファイルを読めば誰だって分かるだから」

「文章読むの嫌いだ。読め。班長命令だ。イリヤⅡCⅡハグストレーム事務官」

「ったく、こんなときだけ権限行使かよ」

「何か言ったか？」

「いいえ。読ませて頂きます班長殿」

現場に出れば全ての権限は班長にある。ソフィアは四課本部でアルビノから聞かされたことを思い出していた。確かに四課本部を離れたこの場の指揮権は九班班長のミハイルにある。命令と言われれば仕方がない。イリヤには拒めない。仕方なしにイリヤは差し出したファイルを引っ込め、ページをめくる。

「三ヶ月前、調査第四課連邦極東管区エヴァンジェ自治州サハ支部設置の探索装置が魔術文献を国立サハ大学付近にて捕捉、現地サハ支部は内偵班を同大学に派遣して調査を開始。まもなく内偵班は魔術文献《ロージャ》を大学内にて確認、報告を受けた四課は四課長名にて連邦議会上院魔術委員会に調査報告書を送付、同委員会が審議した結果、魔術文献取扱法に基づき魔術文献差押令状による強制処分及び同法違反者の検挙を行う旨を決定した。――以上です」

「他の班にやらせろよ。めんどくさい」

ミハイルはぶつぶつと文句を垂れる。

「アウツティの差し金だな。相変わらず女々しいヤツだ」

「アウツティ課長補佐ならフェニキアに出張中です」

「フェニキア？ あんな極東の島国に何の用だ？」

「何でも外務省からの要請らしいですよ。フェニキア政府のお偉方と折衝とか」

「何か企んでやがんな。今度会ったら燃やしてやる」

「何でもかんでも課長補佐のせいにしないで下さいよ、子供じゃないんだから。あとで俺が休日手当の申請しときますから機嫌直して下さい。ね？」

イリヤがミハイルを宥めた。

「……ならいい」

ミハイルは足を組み替えた。

「要するに、今回の任務は大学にある魔術文献を令状振り翳して奪ってこいってことな」

「そんなところでですね。地元警察には応援要請して置きました」

「応援……」

ソフィアが呟く。

彼女の疑問を察したイリヤが説明する。

「令状が下りたとき、図調調査官にはあらゆる行政機関に対しての指揮権が与えられるんだ。これは魔術文献取扱法に明記されてて、令状を持った図調調査官に行政機関は協力しなきゃならない。大抵は地元警察から人員を徴用するのが定石でさ、これがまあ四課が嫌われる原因にもなってるんだけど」

「四課は嫌われてなんぼだ」

ミハイルが吐き捨てた。

「とにかく四課は魔術文献回収に全力を尽くしてりゃいいってこつた」

随分とざっくりとした言いようだなとソフィアは思う。

「魔術文献は今回のように装置で発見するんですか？」

「基本的にね。さっきの報告書にもあったけど、ヘルティアの都市には大抵四課の支部があってね、支部には魔術文献が発動した特殊

な波動を捉える装置があつて、反応した地点には十中八九魔術文献があるって寸法なの。他にも、申請すれば四課本部から借りられる追尾用の魔術文献で探るって手もあるな。まあ、魔術文献あるところに異常ありってこと。俺らは基本的に異常を探知するようにアンテナ張ってれば良いのさ」

イリヤの説明が終わると、ミハイルは持ってきたアタツシキューズに足を載せた。

「帝政時代、魔術文献は宮廷によって嚴重に管理されてた。それが共和制に移行する時のごたごたやら先の大戦やらで多くが流失しちゃった。そんなこんなで多くの人間の手に渡った魔術文献だ。高値で買い取った人間もいただろうし、偶然手に入れてしまったヤツもいる。そういう人間は次にどんなことをするか。FSAなら分かるな？」

「魔術の実践ですね」

「ああ。魔術の知識欲しさに手に入れた人間は言うまでもねーが、偶然手に入れちゃったヤツもどういうわけか書かれていることを試してみたくなる。魔術はなまじ人間なら誰でも使えるからな。魔術文献ってのは人間の欲望を刺激するもんだ。そういう訳で、そうすると普段ならあり得ないことがそこに起こる。例えば、晴れてるのに雷が落ちたとか、変な生物が現れたとか。死因不明の死体がいくつも見つかったとか、そう言う異常を地元警察とか行政機関が認知して、いろんなルートを通じて四課おれらの耳に入ってくる。どうせ今回の一件も異常に気付いた地元警察か、大学当局が通報したのがきっかけだろうな」

魔術文献とは不思議なものだ。ソフィアは改めて思う。

ミハイルはさらに続けた。

「そもそも魔術文献ってのはな、餓鬼が学校で教わるような初步的な内容しか書かれてない物もあれば、空中空母みてえなバケモノが空を飛べるようになる仕組みが考案されるきっかけになるような、本当にとんでもねー情報が書かれる場合もあるんだ。初步的な物は

いいが、バケモノみたいな人の手に余る内容の物だつてごまんとある。精霊研究のヒントになるような物とかな。そういうバケモンは早急に回収しなきゃならねえ」

精霊研究。世界最高のエネルギーと言われる精霊をエネルギー化するための研究だ。先進諸国は軒並みこの研究を国家プロジェクトに据え置き、日夜研究に励んでいる。その研究に魔術文献が大いに活用されているのは周知の事実だ。だから精霊研究に反対している神精教団のようなロムレス原理主義者、過激派組織は研究機関や研究者個人に危害を加える一方、魔術文献の収集にも力を注いでいる。彼らにとっては政府の魔の手から魔術文献を保護する、という大義名分があるのだ。

「魔術文献を野放しにしていると国が滅びるからな。あんたもFSA局員なら俺ら以上に理解してるだろ？」

「何度か魔術文献が絡んだテロ未遂事件に携わりました」

「今回の任務はまだ楽な方だぜ。サハの街は少数民族の街だが、幸いあそこは鉱山の街でもある。連邦政府を受け入れてるし、恩恵を十分に受けてるからヘルティア人に対してもそんなに反感は持ってねえ。これが反ヘルティア感情旺盛なクロベニア人のナベリウスにでも行ってみろ。街歩くだけで撃たれるぞ」

クロベニア人は連邦の西に住む民族だ。そして反ヘルティア感情が強い。五大民族の中で最も数が少なく、そして最も貧しく、歴史的に見ても何度もヘルティア人と戦火を交えてきた。現在は連邦政府と連邦軍の圧倒的な力の前に服従しているが、それでも火種は絶えない。反ヘルティアの地下抵抗組織^{レジスタンス}がいくつも組織されており、内務省爆破テロ事件を引き起こしたのもクロベニア人武装組織の犯行だとされている。

事件の直後、連邦軍は大々的な報復作戦を実行した。三年経った現在もナベリウス共和国には非常事態宣言が発令されたままであり、三万もの連邦軍が駐留している。秘密警察的な役割も担うFSAもそれらの情報収集に躍起になっており、水面下で武装勢力との情報

戦を繰り広げているのだ。FSA局員のソフィアには手に取るように理解できることだった。

「ヘルティアは世界最大の国だ。七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの連邦国家。つてのは有名な文句だが、実際は六つの共和国以外にも小さな共和国、自治州がたくさんあるし、民族の数なんて一〇〇を越えてる。今は連邦政府と連邦軍が盤石だから静かなもんだが、一度燃え上がると連邦は崩壊してもおかしくねえ。『ヘルティアを落とすに兵士はいらない。民族感情を逆なですればそれでよい』つてアナフィエルの言葉も有名だしな」

ミハイルはアタッシュケースをトントンと足蹴した。

「ま、とにかく魔術文献は連邦政府の管理下にあった方がいい。ヘルティアを吹っ飛ばされたくないけりゃな」

基本的に、魔術は人を傷つけられるほど強力なものは少ない。連邦軍は勿論、各国の軍隊の主力兵器が戦車や戦闘機であり、兵士一人一人に銃器を持たせていることがそれを如実に物語っている。しかし、それにも例外はある。人と時間と金をかければ、それなりの成果に見合った威力を叩き出せる魔術は少なからず存在しているのだ。

「連邦の安寧を守るためにも、一般人を犯罪者にしないためにも魔術文献は早々に回収しなきゃなんねえ。それを肝に命じとけ、新人」
空軍機は一路サハを目指して飛んでいく。

任務《3》（前書き）

毎度のことですが、この物語はフィクションです。作品に登場する人物・団体等は実在するものとは一切関係ありません。

任務《3》

サハ。

首都マスクヴァから約七〇〇キロ離れた連邦極東管区エヴァンジェ自治州の主要都市。アクーラ大陸の北東部の永久凍土の上に建設された少数民族エヴァンジェ人の街であり、天然資源の街だ。ヘルティアに流通、国外に輸出されている地下資源の実に六割がここサハ郊外の油田や鉱山から産出されており、地下資源を取り扱う企業の現地事務所が軒を連ねる。北半球に領土を持つヘルティア連邦の中でも最も気温が低い地域に位置しているため、夏でも寒さが厳しい。一步街を出れば、オーロラとシロクマの世界である。

現地時間〇五五〇時。ソフィアとミハイル、そして四課が動員された地元サハ警察からの応援を加えた摘発部隊は、市内中心部、朝靄に包まれたサハ大学の周囲に展開していた。ステーションワゴン六台に分乗した摘発部隊は、大学側に察知されないような絶妙な待機地点で決行時刻を今か今かと待っていた。ソフィアとミハイルが待機するのは正面ゲート、イリヤとクララは裏口でそれぞれスタンバイしている。

『親会社（PC）より各子会社（SC）へ。状況を報告』

『子会社1（SC1）、目標Bを捕捉、現在追尾中』

『子会社2（SC2）、異常なし』

『子会社3（SC3）、計画通り行動を終了』

『子会社4（SC4）、目標Aのゲート通過を確認』

『子会社5（SC5）、所定の位置に到達』

ソフィアは凍り付く窓越しに、サハ大学を見る。首都から遠く離れた地域にも関わらず、立派な建物である。さすがは帝政時代に創設された由緒正しい名門大学である。

予定の時間まで五分を切った。ソフィアは持ち込んだガンケースから散弾銃を取り出した。連邦軍正式採用の軍用半自動散弾銃だ。

少し型は古いが、動作不良が起り難い良作だった。

「ショットガンか」

「殲滅戦にはいいかと思ひまして」

「普段からFSAは使ってたのかよ、んな物騒なモン」

「ケースバイケースです。こだわりはありませんよ」

「あつそ」

ミハイルは令状が入った封筒を掴んだ。着手予定時刻まであと一分。時間だ。ここまでは参謀役のイリヤが立てた計画通りに物事が進んでいた。この上なく状況は良い。仕掛けるなら絶好のタイミングである。ミハイルは各待機車両に無線を入れる。

『親会社（PC）より各子会社（SC）』

——着手しろ。

次の瞬間、各所に配置されたステーションワゴンの扉が一斉に開いた。摘発部隊を率い、ミハイルとソフィアは正面から乗り込んだ。しかしそれを大学の守衛が慌てて制止する。ミハイルは何事かと動揺している守衛たちに調査官証と令状を提示した。

「連邦議会図書館調査局だ。連邦法第七九一号魔術文献取扱法違反容疑でこれより捜索を行う。以上」

「ちよつと、何だか知らないが、とりあえず上と……」

守衛が異議を唱える。身体をいっぱいに使い、同僚の守衛と共に身体を張ってミハイルの行く手を阻んでいる。

「んだからよ」

ミハイルは溜め息をつく。めんどくさい。全身がそう言っているようだった。ミハイルは女の守衛に問答無用で令状を突き付ける。ひっ、と守衛の喉が鳴った。

「強制処分だつてんだろ！！」

ミハイルは何事かまくし立てている守衛たちを無視し、背後に控えるサハ警察の警官たちに踏み込むよう手を振った。それでもそれも阻もうとする守衛たちと揉み合いになる。ミハイルはその狼のような目を一層吊り上げると、素早く懐から九ミリ拳銃を抜き、守衛

の足を撃った。悲鳴を上げてのたうち回る守衛。そんな同僚の姿を目の当たりにした守衛たちは勿論、摘発部隊の面々も息を呑んだ。

「もう一度言うぞ。これは強制処分だ。これ以上邪魔するんだったら頭ブチ抜くからな。死にたくなきゃ道を開けろ」

拳銃で脅され、よろよろと道をあける守衛たちを後目に、ミハイルは摘発部隊の面々を一喝する。

「魔術文献は人類民俗学研究所だ。早急に回収しろ。妨害があれば即座に排除しろ。射殺してかまわねえ」

ぱたぱたと校内に散らばっていく警官たち。

「親会社（PC）より子会社（SC3）へ。予定通り、周囲を完全包囲しろ」

『子会社（SC3）了解』

ミハイルとソフィアも進む。

「新人、少しでも身の危険を感じたら迷わず殺せ」

「了解」

まもなくして銃声が聞こえてきた。まだ遠いが、戦場独特の冷たい臭いがする。発砲したのは先発隊の警官たちか、それとも大学側の抵抗勢力か。

「親会社（PC）より各子会社（SC）。速やかに状況を報告！」
情報が上がってこない。まだ分からないが、急いだ方が良さそう
だ。

「面倒ごとが起こらなきゃいいけどな」

早足で進むミハイルに続く。嫌な予感がするよ、全く。そう呟く
ミハイルにソフィアは無意識に頷いていた。

一

「あれだな」

長方形の白い建物が見える。そこから散発的な銃声が聞こえてきた。強化ガラスか防弾ガラスか分らないが、建物玄関の自動ドアが鋭利な何かで切断され、破壊されていた。先行した部隊が突破した際に破壊したもののだろう。

その自動ドアの大穴を潜って、照明が落ちた施設内部に入る。奥の方から散発的な銃声が聞こえてくるそこは、鼻を覆いたくなるような硝煙の臭いと死臭に支配されていた。強烈な臭いにやられ、思わず込み上げてきた酸っぱい何かを押さえ、ソフィアは右腰のホルスターからハンドサイズのフラッシュライトを抜いた。

広い正面玄関をフラッシュライトの強烈な光を頼りに進んでいくと、改札のような警備機器が置かれている自動ドアが見えた。警備機器の隣には守衛室も見える。さながら駅の改札口のようなだった。ミハイルとソフィアは守衛室内部をフラッシュライトで照らしたが、すぐに後悔した。

「酷いな」

内部で思わず目を疑いたくなるような光景だった。銃創だらけの室内、中央部で三人の守衛が椅子に座ったまま蜂の巣にされていた。血飛沫がそこら中に飛び散り、彼らの足下には血溜まりが出来ていた。腰の拳銃は収まったままだった。恐らくいきなり襲撃されて抵抗する暇もなかったのだろう。

「チキン野郎め。妨害されたら射殺して良いとは言ったが、無抵抗な野郎を射殺しろとはいってねえぞ……」

守衛室前を通り、内部を進んでいくと、そこら中に研究員と折り重なるように血溜まりに沈んでいた。先行している部隊は突入の際に照明系統を徹底的に破壊したらしく、施設内部はどこまでも行っても真っ暗だ。奥から聞こえてくる銃声、悲鳴、施設内を充滿している硝煙の臭いと死臭や、暗闇に浮かぶ死体がどうすることも出来ない根源的な恐怖感を煽る。地獄絵図とはまさにこのことなのだろうと、ソフィアは適当に思う。

「豪華な研究施設だな。さすが大学の研究施設ってところか」

「いえ、これは大学程度ではありません」

「田舎大学だからか」

「いえ、そういう意味ではなくて」

ソフィアはフラッシュライトで機器を照らす。

「どういうことだ？」

「大学程度の予算ではこれほどの研究施設は逆立ちしても作れません」

ソフィアは断言した。

「これだけの施設はヘルティア国内でも五つあるかないか、こんな立派な施設が地方大学にあるなんて、あり得ない」

「おい、どういふことかちゃんと説明しろ」

「これだけ整った設備だと大抵の魔術は解析可能です。地方の大学でこれだけの設備を整えるなんて、中央の大学でもここまでの設備を整えるとなると、小国の国家予算並みの資金が必要です。どれも最新鋭の一流品ですし」

「計器にゃ興味ないな」

「身も蓋もない言い方ですね」

「人間興味がないことなんてみんなそんなもんだろ」

視線を逸らし、ミハイルは正直にそう言った。

「魔術研究は近年盛んですから。魔術と精霊のエネルギー化の研究分野が重なりますし、精霊を知りたければ魔術を知れ、が鉄則なので。ここまで本格的な機材入れているということは、本気で魔術、もしくは精霊を研究していたのでしょう。しかし問題は資金の出所です。背後にどんな組織がついているのか……」

尤も、この辺はヘルティアの重要拠点に間違いはない。連邦が他国に輸出する地下資源の六割はサハ郊外で産出される。地元民の心を掴むため、インフラ整備に投資しても損はないが――。

「資金の流れを早急に調べるべきかと」

「分かった。先に進むぞ」

早足で二人は構内を進んでいく。死臭や硝煙の臭いが段々キツク

なってくる。死体がそこかしこに転がっており、真っ赤に染まっている場所が至る所に点在していて、非常に生々しい。特にこの奥の区画へ続く廊下は死体の数が多い。壁や床を抉る銃創の数も多い。それだけでこの廊下は激戦区であったことを何よりも雄弁に語っている。

「こりゃスゲエな。押収品を本部に送るだけでも難儀しそうだ」

研究成果だろう。論文、資料、その他様々なデータが記された書類が所狭しと並んでいる。ソフィアはフラッシュライトを頼りに、書類が詰まった辞書のように分厚いファイルを無作為に手に取ってみた。どこかに転送しようとしていたのか、研究者間で使われる専門用語が訳されていた。学会向けの資料ではない。ファイルのタイトルは、

「????? I m p e r a t o r」

「なんか見つけたか？」

「いえ。特に」

どうせここの資料は四課が残らず押収するはずだ。四課の分析班に任せればいいこと。ソフィアは自分にそう言い聞かせ、ファイルを元あった場所へ戻す。

「班長」

ライフルを抱えた警官を引き連れ、暗闇の向こうからイリヤが現れた。

「敵の掃討は大方完了した」

「よし。んで、何人殺した？」

「さあ。俺が見た限りじゃ二〇人前後ってところでしょうかね」

「クラーラは？」

「奥。まだ敵の匂いがするんだってよ」

「犬みたいですね」

「違うない」

鼻で笑い合うソフィアとイリヤ。

「で、これからどうするか……」

ミハイルが呟く。

「イリヤ」

「そうだな」

イリヤが進言する。

「各隊との連携を密にする。どこで敵が盛り返してくるか分からないからな。んでさ、次に隊を三つに分けるのはどうだ？ 一つは投降した連中を署に連行する班、もう一つは所内の探索する班、最後は研究所の外周警備する班だ」

「外周なら警備担当がいるだろう？」

「保険さ。一般の大学関係者は別として、研究所の関係者を逃がしちゃまずいだろ？ なあ、ソフィア」

「そうですね。研究所はほぼ制圧しましたし、警備に人員を割いても問題は無いかと」

「分かった。そうしろ。あとイリヤ、探索班の連中に言っとけ。警備員はどうでも良いが、研究員は生け捕りだってな」

「了解」

イリヤはのんびんだらりと敬礼すると再び暗闇の中へ戻って行く。

「二〇人近くも殺すなんて……。調査に影響しなければいいですね」
「だな」

ミハイルとソフィアは調査活動を再開する。

「それにしても死体が多いな。死体が、……七つ。これも数に入ってるのか？」

「施設側も研究室を守るために必死だったのでしょ。この区間に死体が集中していますから、守る側はどうしてもここを突破されてはいけなかった」

「この先は何がある？」

防寒服のポケットからソフィアは再び携帯端末を取り出して確認する。今回の一件に関わっている人間には、それぞれの携帯端末に研究施設の見取り図が配布されている。見取り図には、その区画がどのような役割を示していたかという情報は勿論、各区画の搜索を

担当している人物の氏名や所属といった情報も、たちどころに分かるという優れたものだった。ソフィアは端末を操作し、見取り図を呼び出す。

「データには研究室とあります」

「そこに保管していた魔術文献を死守しようとした、か？」

「そうかも知れません」

「それほど守らなきゃいけないってことか。さて、どんなバケモノ文献があるのやら。楽しみだな」

「不謹慎ですね」

「楽しまねえと損だろ。何事もな」

「不謹慎ですね」

「どーとでも言え」

ミハイルとソフィアは施設最深部へと進んでいく。通路を奥に行けば行くほど血糊や壁の銃創が増えていくような気がしたが、やがて研究室周辺に到達すると、圧倒的な光景が目の前に現れた。

「これはなんとまあ……」

先着していただろう警官隊の姿はもうない。ミハイルが新たな指示を出したからだ。ミハイルとソフィアの目の前には表れたのは、体育館ほどのスペースに唸りを上げるタワーのようなコンピュータが雑木林のように乱立している光景だった。何台もの巨大なコンピュータが並び、地鳴りのような低い音を響かせている奇妙な空間である。

コンピュータからは太いケーブルが伸び、中央に鎮座している壊れた円筒形の水槽に繋がっており、水槽には壊される前には何かしらの液体で水槽は満たされていたらしく、床に得体の知れない液体が広がっていた。中央の水槽は破損しているようだが、コンピュータがまだ作動しているということは研究室自体の電源は他と別系統だろう。他の施設の電源は制圧作戦時に全て破壊したはずだが、ここだけは生きていた。恐らくこのフロアだけ電源系統が別なのだろう。

「なんだよこのコンピューター」

「どれも最新型です。これだけのコンピューターを集めていることから魔工学の研究施設と考えた方が無難ですね」

ソフィアはコンピューターに刻み込まれた型番を見ながらそう言った。

「魔工学？」

「魔術分野と工学分野を掛け合わせようという学問です。まだマイナーな研究分野ですが、連邦軍の研究機関である特科研では早くから魔工学の可能性に注目していて、最も人と金を注ぎ込んでいる分野の一つです。ちなみに現在の魔工学の最高傑作は空中空母のエレメンタルエンジンと言われています」

「お前、無駄に詳しいな」

「連邦軍士官学校で専攻していましたから」

「あつそ。でよ、これもあれか？ 国家予算並みの施設か？」

この分野に関しては全くの素人であるミハイルが溜め息を付き、ぺしぺしとコンピューターを小突く。

「そうですね。精密機械なんですから壊さないでくださいよ。あとで調査してもらうんですから」

「あ？ いくらするんだ？」

「一億くらいですかね」

「全部で？」

「一台で」

「げっ……。つーか、一台一億って、何台あるんだよ」

ソフィアはそこが引っ掛かっていた。なまじこの分野に精通しているだけに、ソフィアは疑問に思う。事実上、ヘルティア最高にして最大の研究機関である特科研^{とくかけん}？？？連邦軍特殊科学研究所と同等の研究施設がこのような地方大学にあるとは。いくら連邦政府や州政府から補助金が降りているとは言え、国家予算並みの設備をここまで充実させる事は不可能だ。ならば、どこかの組織が資金援助していた可能性が濃厚だ。

「班長。この施設、もう一度洗い出す必要があります。表も裏も、職員の経歴に家族、機器の納入業者まで徹底的に」

「そうだな」

小さな爆発音がした。聞こえてきた方向を見れば、その方向からミハイルが戻って来た。

「魔術文献はありましたか？」

「ああ。その金庫に入ってた。安っぽい金庫でよ、開けて下さいつて言ってるようなもんだな、ありゃ」

ミハイルの手には魔術文献専用のアタッシュケースが握られていた。

「まさか、その金庫……」

「面倒だったからな。一発燃やしといた。何か文句あっか？」

「いえ」

やり方が強引。言おうとしたが、ソフィアはその言葉を飲み込む。「魔術文献は見つかったんだ。もうここには用はねえ。後片付けはサハ警察に任せて俺らは撤収するぞ」

そしてミハイルは獰猛な笑みを浮かべながらこうも続けた。

「これから署に連行した関係者の取り調べだ。楽しい楽しい取り調べだ」

二

屋上に上がった瞬間、ひゅわっと肌を裂くような冷たい風がソフィアを包み込む。

屋上は荒涼とした感じだった。ちよつとした柵がぐるっと屋上を囲んでおり、何に使ったのか分からない、錆びて触っただけで崩れてしまいそうな物干し竿が三つも並んでいる。足下のアスファルトはひび割れが激しく、そこから雑草が顔を出していた。切れ間に緑

の藻が生えているアスファルトを踏み締め、徘徊するも何もない。砕けた塗料の欠片とか、コンクリート片しか落ちていない。無機質な世界だけに、落ちている物も無機質極まりない。何ともまあ寂しい世界だ。ただ、眺めはいい。サハ警察本部の屋上からは街が一望できた。夕焼け色に染まる白銀の街が、何とも幻想的に見えた。

「なんか引き出せたか？」

ミハイルはフェンスに背中を預けていた。

「主任研究員が死んだのは痛手です。ただ所長が生き残っていたので、突破口が全く失われた訳ではないので、背後関係の解明は時間の問題でしょう」

ソフィアはミハイルの隣に立つ。

「所長の供述によると、大学は定期的に六年前から裏で多額な寄付を受けていたようです。相手はサハ大学OBでマスクヴァ在住の資産家だと名乗ったそうですが、どうも怪しいですね。イリヤさんが四課本部に照会していますが、身元が割れるかどうか」

何気なくフェンスに手をかけて下を覗いてみたが、直ぐに後悔した。怖い。怖すぎる。目が眩んでしまった。足の辺りがぞつとして、思わずフェンスから離れた。頭もクラクラする。

「資金力から考えると大きな組織だな。神精教団、その下部組織だったら厄介だな」

「ええ。ですがまだ神精教団系列と判断するのは早計ですね。大方、非合法組織による魔術、魔術文献の研究に利用されていたのでしょう。所長は何も知らなかったようですが。何れにせよ、面倒な一件になりそうです。背後関係次第ではFSAの介入も視野に入れた方が良さそうです」

「つたく、四課長め、完全に見込み違いじゃねえか。ガイドウコフあたりエース班投入してりや面倒なことにならなかったのによ」

さて。ミハイルは一息ついてフェンスから離れた。

「話は変わるが、さっき四課本部から連絡があった。俺らは撤収だ」「この件はどうなるんです？」

「本部から人が送られてくる。そいつらに引き継いだら俺らの仕事はおしまいだ。早急に本部に戻って来いってよ」

「何かあったんですか？」

「いや。ただ戦力の分散を避けたいだけだろ」

ミハイルは金網に身体を預けながら言う。

「今な、四課はちょっとした大物を扱ってんだ」

「大物、ですか？」

「魔術文献『グノーシス』。帝政期、皇帝お抱えの魔術文献作家が作り上げた魔術文献の傑作中の傑作、そして最も異端な存在だ。何でも聞いた話じゃインペラートルの魔術が納められて、使えば世界を征服できるんだと。革命の混乱で長い間所在が掴めてなかったんだが、一ヶ月前に見つかったらしくな、四課本部まで輸送することになったんだが、いろいろ面倒らしくて、いろいろ『地均し』してようやく後は輸送するだけ、つてとこまでもってこれたらしい。つまり、護送作戦で人手不足だからさっさと帰って次の現場に行けてこった」

「……インペラートルの魔術、ですか」

「ああ。お伽噺かつつの」

「無事護送が完了すればいいですね」

ミハイルには、それがあまりにも冷徹な言葉に聞こえた。そして思う。これがFSAかと。ミハイルはFSAに在籍したことはない。一方、ソフィアはFSA局員として、諜報員として、感情を抑える訓練は嫌と言うほど受けてきた。そして今まではそれを忠実に実行していた。如何なる時も冷静に、あるいは冷徹でいられるように努力してきた。だからこそその言葉だった。

「つーわけで、撤収だ」

背中越しにミハイルは言う。

「了解です。班長」

任務《3》（後書き）

今年初めての更新になります。遅れましたが、今年もよろしく願
いします。

ピーチェルの撲殺魔《1》（前書き）

もう毎度のことですが、この物語はフィクションです。作品に登場する人物・団体等は実在するものとは一切関係ありません。

ピーチェルの撲殺魔《1》

外套に目深く被った中折れ帽子、人とは思えない、まるで影のような、屍のような『それ』は何気なく手元のボールを見つめていた。大量の血と肉片、それに髪の毛なんかがへばりついていてるボール。そして『それ』の足下には死体が一つ転がっていた。ついさっきまで女だった頭部のない死体を月夜が照らしている。頭部は『それ』がボールで殴った結果、肉片になってどこかに飛び散っていつてしまったのだ。手っ取り早くイメージするならば、スイカ割りのスイカだ。

遠くでパトカーのサイレンが聞こえてきた。ゆっくりと『それ』は振り返る。

そして『それ』は吸い込まれるように夜の街に消えた。

一

首都マスクヴァから西に九〇キロ。

ヘルティア連邦有数の湾岸都市であるピーチェルは、マスクヴァ次ぐヘルティア第二の都市である。帝政ヘルティア初代皇帝ピョートル一世によって造営され、帝政初期から中期にかけての約八〇年間に渡って帝都が置かれていた歴史と伝統の都市だ。派手好きで有名なピョートル一世は、皇帝座する都は壮麗であるべきと、必要以上都市の景観に執着した結果、市街地中心部に運河が縦横に巡る世界有数の美しい都市となった。一方で、その壮麗さを引き出すためにピョートル一世が行った造営作業は過酷を極め、一説によると五万人もの労働者が死亡したと言われる。

ヘルティアで最も壮麗と言われるピーチェルは、美しい景観目当

てに内外から観光客が絶えない街だ。

――が、普段ならば観光客でごった返しているピーチエル有数の観光スポット、大帝通りは閑散としていた。観光客をターゲットに経営している店は閑古鳥が鳴いている。

そんな街を黒尽くめの二人が街に行く。二人とも双頭の鷲の記章が付いたトレンチコートと制帽、そして『凶調四課』と大きく赤地に白抜き腕章と同じ装いだが、身長と風貌はまるで違った。

「こんなに歩きやすいピーチエルは初めてだなー」

二人の中で小さな方、クララーⅡクニャジェワが他人事のように呟く。

「そりゃ誰だって撲殺魔に会いたくないだろ？」

クララーから半歩下がったところを歩いている大きな方、イリヤⅡCⅡハグストレームは大量の地元紙と週刊誌を抱えていた。どれも扱っている話題は一つだ。『鮮血に染まるピーチエル』、『警察もお手上げ、奇怪な連続殺人事件』、『観光客激減、地元経済に大打撃か』など、派手な見出しが躍っている。

「ってやべーじゃん！！ これじゃーどこも酒場閉まってる！！」

「それを気にするのはテメエだけだよ」

「どっか空いてる酒場探しとかねえと……。ピーチエルは地酒が甘いしな、この機会を逃す訳には……」

ぶつぶつクララーが呟く。

「イリヤー。外回り終わったら飲みに行っていーかー？」

「勝手にしろ」

観光都市であるピーチエルが閑散としている原因は、ここ数週間続いて発生した連続猟奇殺人事件が関係していた。

ことの始まりは三週間前、ピーチエル五番街で発生した殺人事件だった。二四歳の女性がハンマーのような鈍器で撲殺された。頭部は粉々に砕けてなくなっていた。当初、その執拗な殺害方法から警察は怨恨の線で捜査していたが、この事件を皮切りに女性ばかりを狙った連続撲殺事件が発生したのである。ピーチエル市警の懸命な

捜査にも関わらず、犯人逮捕の目処は立っていない。この殺人犯はピーチェルの撲殺魔とも呼ばれ、ピーチェル市民を恐怖のどん底に突き落としていた。

この件にイリヤとクララら、図調四課が介入した理由の一つだ。犯人の背後に魔術文献の匂いがあるからである。そしてどぶ川の底を洗うような捜査を行っているにも関わらず、捕まらない犯人。

通常、四課の実動部隊たる執行班を投入するのは、魔術文献が確認されてからである。しかし、この事案においては支部に設置されている探索装置に反応はなかった。支部所属の内偵班の調査も不発に終わっていた。そのような状況下だが、四課長ら四課首脳は執行班の投入を決定した。

四課長からイリヤたち九班に与えられた指示は一つだ。魔術文献の有無を確認しろ、である。

しかし、状況が状況だけに、不確定事項があまりにも多い。ピーチェルに魔術文献の存在を示す証拠は何一つない。一筋縄ではない事件であることは間違いない。四課長曰く、可能性は五分五分らしい。

まもなく警官と規制線が見えて来た。警察車両が並んでいる。二人がやってきたのは、三日前、女子大生が殺害された現場だった。今もまだピーチェル市警の鑑識班や刑事たちが捜査中のようなだった。

「……うわっ」

思わずイリヤは顔をしかめた。警備体制が物々しい。フルフェイスのヘルメットに防弾ジャケット、自動小銃という完全武装の警官隊約三個分隊が警戒態勢を取っている。二人の姿を見付けると、一斉に銃口が二人に向く。

これでもかとはばかり殺気立っている。警告なしで自動小銃の引き金に指がかかっている。安全装置も既に解除済みだった。いくら実戦経験が豊富な四課員だろうと、さすがにこの距離で自動小銃では身体中穴だらけ、無傷ではいられない。それでもなお、迎撃しようと太もものケースに入れている得物に手をかけ、やる気満々なクラ

ーラを押しとどめ、イリヤはやや泣きそうになりながら腕の腕章をアピールする。

「図調四課のイリヤⅡCⅡハグストレーム事務官です。責任者の方、いらっしやいます?」

そう告げると武装警官たちは互いの顔を見合わせたが、無線で通信し始めた。

やがて銃口が下ろされ、規制線と武装警官たちの奥から一人の男が現れた。現れた男は四十代くらいの捜査官だった。立ち振る舞いから場数を踏んでいるベテランであることはすぐに分かった。警察関係者を表すジャケットに警察バッジを首からぶら下げた彼は不機嫌そうにイリヤたちの前までやって来た。

「FCBのエゴールⅡリヤザノフ捜査官だ」

よく見ると彼のバッジはピーチエル市警のものではなかった。武装警官の腕にもピーチエル市警とは違う記章が付けられている。

「図調四課事務官のイリヤⅡCⅡハグストレームです。FCBの方でしたか」

イリヤは柔らかに微笑んだが、リヤザノフ捜査官の表情は硬い。

「昨日付けで本件事案は重要犯罪に指定された。よってピーチエル市警と合同捜査なのだ。文句でもあるのかね?」

「いえいえ。滅相も無い」

ヘルティア連邦刑事局（FCB）。連邦国家であるヘルティアの警察機構は地域ごとに組織されているが、近年の広域化、高度化する犯罪に対応するため、五年前に各自治体の捜査機関から優秀な捜査官を引き抜いて設立された司法省傘下の国家警察だ。FCBは広域犯罪など、個々の捜査機関では対応できない事案を専門に扱う組織である。

しかし、ヘルティアにはFSAがあった。旧来から広域犯罪捜査を担当していたのは、FSA第一総局だ。わざわざFSAと所管業務がほぼ重なる組織を数千の人員と多額の税金を注ぎ込んで設立した司法省に言わせれば「FSAだけに権限や情報を独占させておく

事はない」という事であり、末端ではF S A第一総局とF C Bの手柄の取り合いには凄まじいものがある。また、F C Bは早く実績を積みたいのか、自治体レベルの事件でも強引に広域犯罪に指定して地元警察から事件の横取りとかえげつないことやっているみたいで評判が悪い。

「ところで連絡させて頂いた件ですが、宜しいでしょうか？」

「……勝手にしろ」

イリヤは柔和な笑みを作るが、

「言つとくが、これは俺たちの警察の事件だ。本来、令状もない図^あ調四課に協力する義務はないんだぞ。それと、分かっていると思うが何があっても現場だけは荒らすなよ？」

「ええ。心得ています」

「言っておくが、本部長から『現場を見せてやれ』と言われたただけだ。絶対に余計なことはするな。そこのお嬢ちゃんにも良く言い聞かせておけ」

「はい」

ピーチエル市警の責任者の態度が癪に障ったのか、がるると吠え、今にも噛み付こうとしているクララを強引に押さえつけつつ、イリヤは大人の対応をする。

「じゃあ、こっちだ。さっさとしろ」

イリヤはそのまま苦笑する。図調四課は他の治安機関からのウケが悪い。連邦至る所にしゃしゃり出て、令状をかさにかかけ、地元治安機関を動員し、現場を引っ掻き回すだけ引っ掻き回し、魔術文献を回収したら事後処理もせずさっさと礼も言わずに引き上げる。これでは評判も悪くなる。四課としては慢性的な人材不足で事後処理に人員を割けないだけなのだが、言い訳したところで誰もはいそうですかと納得してくれない。結果、四課の印象は非常に悪い。これらのマフィアよりも悪い。F C Bと同じ嫌われ者なのだ。

「ご協力感謝します」

「ふん」

ようやく規制線の中に入ることを許された。

図調四課の基本的な職務は魔術文献の管理と修繕、そして収拾である。ヘルティアでは魔術文献取扱法によって個人での魔術文献の所有は禁止されているが、連邦政府が許可した合法的な魔術文献は社会にかなりの数が流通している。魔術文献とは魔術の教科書だ。魔術は人の生活を豊かにするが、一方で大量破壊兵器に等しい物も存在する。必然的にそれを使って国家転覆を謀る者も存在するのだ。ヘルティアは他民族国家であるから常にそう言った反連邦政府過激派が散見される。ちなみにそのようなテロ組織を発見、殲滅するのはFSAの役割だ。あくまで図調四課は危険性の高い魔術文献を発見し、回収することが任務である。他にも治安維持業務の真似事や、テロリストやマフィアの捜査などもする場合もあるが、それは例外中の例外に過ぎない。

「あんだ、事務官とか言ったな」

「はい」

「四課はこの件に介入するのか？」

「我々としては、現場の様子を鑑み、上司に報告した上で??？」

「社交辞令はなんざどうでも良いんだ」

リヤザノフ捜査官はぴしゃりと遮った。

「答える。四課は介入するのか？」

「何とも申し上げられません。報告した上で上司が判断すべきことですから。一介の事務官風情が判断すべきことでは御座いませんで」

先ほどはあっさりスルーされた柔和な笑みを再び浮かべる。

「事務官風情、ね」

警察車両や鑑識員、私服警官らの間を抜け、ようやく目の前にブルーシートで覆われた一画が見えて来た。二人は白い手袋を填めた。「ここだ」

リヤザノフ捜査官が天幕を捲った。

「それにしても酷いな」

ミハイルは現場写真を置いた。写真には頭部のない死体が写っている。切断されたのではない。そのまま潰されたのだ。その証拠に、本来ならば頭部があるべき場所に砕け散った“頭部だったもの”が広がっている。

「快楽のサイコ野郎の仕業か？」

「合同捜査本部も犯人像の絞り込みには難航しているみたいです」

ミハイルとクラークは支部の一室にいた。その活動が連邦全域に渡るため、凶調四課は各主要都市に支部を設けている。各支部には四課の本部要員が数名配置されており、彼らは駐在員と呼ばれている。四課本部から派遣されてきた執行班の任務を陰ながら支援することが支部と駐在員の任務だ。

「三日前のケースを含めて一四人目か。やるな、ピーチェルの撲殺魔」

「いずれも狙われたのは女性です。五番街の事件を皮切りに今回で一四人目。殺害方法は何れも撲殺、頭部がバラバラになるほど殴りつけています。共通点は特異な殺害方法ですね。どうやって頭を潰すほどの力を出したのか……」

ピーチェル市警とFCBの合同捜査本部から取り寄せた事件資料を洗い直す。もうすっかり日が暮れてしまっている。

「実に安直だが、けどその安直な撲殺魔に警察はお手上げ状態か」

ミハイルは十四枚の写真を前に腕を組んだ。

「犯人の目星すら付いてねえからな。見付けようにも面倒だ」

ミハイルが頭を掻く。

「こーなったら地元のワル共片っ端から締め上げっか」

「止めてください」

立ち上がろうとしたミハイルを冷静にソフィアが制する。

「下手に刺激すると面倒ごとが増えますよ。それに単独犯じゃなかったらどうするんですか？」

「共犯者がいると思うか？」

「殺害方法は多種多様ですし、現段階では情報が少なすぎて単独犯とも複数犯とも断定出来ませんね。一番手っ取り早いのは現行犯で捕まえちゃうことなんですけど。例えば、おとり捜査とか」

「それくらいのこと、警察がやってんじゃないの？」

「先ほど合同捜査本部に確認しましたが、夜の警戒を強化しているだけでおとり捜査のようなことは行っていないようです。まあ、これだけ女性が殺されているんです。志願する女性警官だっていないでしょうし」

「なら手っ取り早い奴がいる」

ミハイルが不敵に笑う。

「四課で最も馬鹿でタフなやつが」

「幼女にオトリ捜査させるんですか？」

犯人を断定する方法は簡単だった。手っ取り早く襲われれば良いのだ。つまりおとり捜査である。良識や法などのしがらみに囚われた警察には行えない手法であるが、実戦経験豊富で、良くも悪くもそれぞれ頭のねじが飛んでおり、ある程度超法規的組織な側面を持つ組織に籍を置く四課員にとって躊躇する理由はない。警察は犯人を逮捕するために捜査するが、彼ら凶調四課は魔術文献を確保するために調査する。凶調四課は人間を相手にしていない。凶調四課が相手にするのは魔術文献だ。その過程で人間を相手にするのであって、警察の捜査手法とは一線を画す。どちらかと言えばFSAの手法と近いだろう。

「もし撲殺魔が現れたら確保させるさ。打ってつけだろ」

「魔術文献が確認できれば別ですが、できなかった場合はあしらった後で尾行するのが得策かと」

「尾行？」

「尾行して撲殺魔の居所を確認するんです。そこで魔術文献が確認できれば令状とって踏み込む。最悪、令状がなければ警察に逮捕状を取らせて踏み込む。捜索にはあたしたちも立ち会って、魔術文献があれば確保する。不発であれば一度戻って体勢を立て直す、というのはどうでしょうか？」

「……駐在員はどう動かす？」

「決め手を欠く以上、地元を良く知る駐在員の情報も重要です。引き続き調査を継続させる必要があるかと」

ミハイルはソフィアの進言に腕を組む。

「イリヤ、どう思う？」

「異議なし」

ぬつとイリヤが顔を出す。先程、殺害現場、合同捜査本部と回ってきた彼の手には警察から借りてきた資料が満載だ。

「射殺とか絞殺とかポピュラーな殺し方だったら基本的に問題ないけど、今回はちと手口がおかしい。魔術文献が関わっている可能性は確かに五分、急がば回れって言うしな。相手が単独犯とは限らないし」

イリヤは音を立てて資料を机の上に置いた。

「今までの経験上、魔術で人を殺すヤツは街をも壊すしな。いろいろおっ始める前に潰すべきだろうな」

普段から過激派やテロリストと交戦している四課員にとって、ただの殺人犯程度にそこまで怯える必要があるのかと思う。四課員の半数は恐怖の感覚がずれているのだ。四課員にとっての恐怖は魔術文献を悪用され、その結果、多くの人命が失われることこそが恐怖なのだ。別に殺人犯など怖くない。だって今回のピーチェの撲殺魔だって一四人しか殺していない。魔術文献が悪用されれば何万という命が一瞬にして消える。人命どころか国家すら消えてしまうことだってあるのだ。

「……うし、じゃあそれで行くぞ。オトリはクララ、俺らは駐在

員らと張り込みだな」

「幼女だったら問題ないでしょう。殺しても死にませんし」

「担当事務官の俺が言うのもあれだけど、四課で二番目にタフだからな」

イリヤが苦笑する。

「二番目？」

ソフィアが首を傾げると、イリヤが答えを言う。

「一番は四課長だ」

「なるほど」

ソフィアは毎回直属の上司であるアルビノに殴られて叩き起こされた四課長の姿を思い出し、納得した。

「んで、イリヤ、肝心のクラーラは今どこだ？」

「そう言えば見てませんね」

「クーか？ クーなら飲みに行ったぞ。もうできあがつてるだろな」
資料を捲りながらイリヤはさも当然のように言う。

「呼び出せ」

溜め息を付き、ミハイルが言う。

「了解です」

ソフィアが自分の携帯端末を操作していたその時、室内にアラートが鳴った。同時に支部員が飛び込んで来る。

「バクーニン班長、出ました、魔術文献です！！」

「場所は！？」

「ピーチエル二番街！！」

「ソフィア！！」

「はい！！」

ソフィアはガンラックから散弾銃を掴み取った。

『図調四課が？　また厄介だな……』

「はい、課長。四課がこの件に介入すれば捜査が混乱します。できれば課長経由で何とか圧力をかけて頂けませんか？　これは我々の事件です」

『難しいな。相手はあの女狐の図調だ。出来るだけのことをやってみるが、あまり期待できないぞ』

「事態が事態です。これ以上、事件が長期化しますと、国民にFCBの失態と取られかねません」

『……分かった』

「お願いします」

電話を切ると同時にエゴール・リヤザノフは溜め息を付いた。ピーチエル市警本部にあてがわれた一室からピーチエルの街を眺める。課長は全力を尽くすと言ってくれたが、どれだけ効果があることや。もう一度溜め息を付く。事件は進展しないわ、図調四課が介入してくるわ、新たな被害者が出てくるわ、全く事態は悪い方へ悪い方へにしか進んでいかない。

FCBが事件に介入して三日経った。FCBも本部から捜査官延べ五〇名以上投入した。捜査態勢は充実している。だが、犯人は捕まらない。犯人像も掴めていないのが現状だ。一刻も早く犯人を逮捕し、ピーチエル市民を恐怖から救わねばならない。捜査の陣頭指揮を執る者として、そして一人のFCB捜査官としてリヤザノフは思う。

「図調四課……、魔術か……」

図調四課は魔術文献の存在が疑われるところにしゃしゃり出てくる組織だ。

「……？　魔術文献絡みか」

仮にピーチエルの撲殺魔が魔術文献を所持している者だとしたら、検挙は難しくなる。警察は魔術文献が絡んだ事案を捜査することは基本的に無い。魔術文献が絡む事件は大小問わず国家公安に関わっ

てくる。事件が公になる前に、専門の機関である凶調四課か国家公安を一手に担うF S Aが秘密裏に問題を解決してしまうため、警察に捜査するチャンスは回ってこない。

ならば。ならばやることは一つしかない。

リヤザノフは電話を取った。慣れた手つきで番号を押す。

「私だ」

出たのはリヤザノフの片腕の捜査官だった。

『リヤザノフさん、何でしょうか』

「凶調四課の支部がこの街にあるか？」

『凶調四課ですか？ えーっと、ちょっと待ってくださいね……、

……ああ、ありますね。ピーチエル九番街ですね』

「信頼できるF C B捜査官を招集してくれ。私もそっちに向かう」
電話を卓上に戻す。

やることは一つしかない。四課の動きを徹底的にマークするのだ。悔しいが、調査能力は警察よりも凶調四課の方が格段に上だ。やつらは人ではなく魔術文献を追う。警察では無理な捜査も平気です。時には人を殺してまで魔術文献の在処を探し出す。やり方に一切の妥協はない。

凶調四課は厄介な存在だ。だが、利用しない手はない。

四

暗闇が支配するピーチエル二番街路地に『それ』はゆっくりと姿を現した。

漆黒の中折れ帽子に外套。凶体のかい『それ』は、見た目で男か女かすら区別はつかない。闇に紛れるように『それ』は無人の路地を進む。ゆっくりとゆっくりと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4068n/>

インペラートル

2011年8月20日03時15分発行